もやもやクエスト！

Taka多可

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もやもやクエスト！

【Ｎコード】
Ｎ６１１０Ｕ

【作者名】
Ｔａｋａ多可

【あらすじ】
※お知らせ…
残酷描写なしを目指していましたが、どうしてもはずせないお話が出来てしまいました。サブタイトルに必ず「残酷描写あり」と書いておきますので、苦手な方は避けてください…
なるべくぼかして書きますが…本当にすみません…※

歩道橋から転落し、即死してしまった僕。
滝（たき）　灰十（はいと）

でも、気がついたらなんだか、赤ちゃんになってました。
しかも、中世ヨーロッパ風な世界。つまり、異世界。
これって、いわゆる転生ですね！
ひゃっほう！！！　　……

そんなこんなで、ぬる～い冒険小説、はじめました。
残酷描写や激しいバトルシーンはちょっとだけ。　大人な恋愛はほとんど出てきません。
目的はありますが、最終着地点は決まっていないまま。（ええー）
たらたらと書き連ねていきたいと思います。

それでは、のんびりお読みくださいませー。

※お知らせの更新。　登場人物簡易紹介（主人公乳児編）

あらすじにも書きましたが、ぬる～い冒険小説です。
過激なバトルシーンや残酷描写は、なるべく控えめに。
大人な恋愛は、『ほとんど』でてきません。

…大人な恋愛は、ただいま主人公の両親の話を書きたく検討中です。

ムーンライトノベルズ（１８禁）にて掲載を予定しています。
投稿が決まり次第、新しく枠を立ち上げてご連絡します。。。。。

本編は温くて緩い、のんびりしたお話なので、軽く読んでください。

では、どうぞー。

※登場人物簡易紹介。

●滝　灰十　（たき　はいと）
生前、中学二年生。
誕生日は６月１日。
ハンドルネームは、アシュッド。
ファンタジーやファンシー、小説と漫画とゲームが大好き。
梅雨の季節に歩道橋から足を滑らせて転落し、即死してしまう。
しかし…？

●メッシュ・マルタ
とある村の元気な男の子、３歳、長男、黒髪。
将来、脳筋野郎になる可能性がある残念な少年。
父親を見習い、剣術に熱中。
ギルドで腕を磨き、王都の王宮専属護衛兵になるか、ギルドで護衛依頼を全部こなすのが目標。

●ミリアーナ・マルタ
通称ミリー。
メッシュの双子の妹、３歳、長女、橙髪。
兄より賢くて、一人で絵本を読める。
母親を見習い、魔法の勉強をしている。
魔法学校へ通い、ギルドで活躍するのが夢。

●アッシュ・マルタ
マルタ家の末っ子で、次男。橙髪。
生まれたての０歳。
動物に懐かれやすく、散歩に連れ出すとカゴの近くに寄ってくる。
とにかく、よく寝る。
メッシュが赤ちゃんの時に寝ていた手提げゆりカゴがお気に入り。
しかしミリーのカゴだとなぜか寝られない。

●ガンキッシュ・マルタ
上記三人兄弟の父親、２９歳。橙髪。
以前は王宮で門番をしていた。
しかし城下街に接近した魔獣との戦闘で左腕を失い、引退。

兵士の小隊長からのはからいで、ギルドで事務職をするほか、期限間近な依頼をこなす仕事をしている。
子供が大好きなマッチョ。　ていうか熊みたい。
通称『元・門番長（もんばんちょう）』

●ノリエール・マルタ
ガンキッシュの妻。黒髪、前髪あたりだけが銀色。
約２４歳、３児の母にはみえないスレンダー。　（多分２１歳で出産。ガンキッシュは２６歳。）
魔法使いだが、日常生活に便利な魔法のほうが得意。
旦那Ｌｏｖｅで、子供Ｌｏｖｅ。
以前は孤児で、モンスターを無差別にやっつける、殺戮趣向者だった。
突然の転身に何があったのかを聞くのは野暮なこと。旦那が原因なのは当たり前だ。
古称『白い悪魔』

とりあえず、現時点での登場予定人物たちです。

1話。　終わった日。

僕は中学二年生。
ファンタジーやファンシーなものが大好きで、小説や漫画やゲームが大好き。
ゲームは特にＲＰＧとパズルが好き。
そんで、いわゆる中二病患者。
……まぁ表には出さないし、他人に迷惑かけてないし、いいよね。
僕が好きなように僕として生きていられるのは、インターネットの世界だけだ。
武器と魔法の世界。
全てがきらきらして見える画面の中の命。

犬属や猫科の動物が好き。
生まれ変わったら猛獣使いになりたくて、ゲームでもモンスターを仲間にするのが楽しい。
モンスターを捕まえて、ビシバシムチ打って、放り投げて、やっつけるんだ。
ほかには高い木の実をつかんだり、遠くにある宝箱を引き寄せたり。
ふふふ……
楽しいだろうなー。

んふふふふ……

おっと、現実に戻ろう。

本名は
滝(たき)　灰十(はいと)
先出だが、中学二年生。
誕生日は6月1日。
ハンドルネームは
アシュッド

灰が、英語でアシッドって言うらしい。…多分…？
そのまんまだとかぶる人がいたので捻ってみた。
そんな感じの名前。

うん。
大丈夫、覚えてる。

さて、そろそろ…
あの日、あの瞬間。
何があったのかを思い出そう……

たしか、梅雨の長雨。
妹からの誕生日プレゼントの傘をさしてた。
白地に青と緑とオレンジの雫柄のカラフルな傘。
交差点で、信号待ち。
トラックに泥をはねられて友達に笑われてたんだ。
そうだ、中学の帰り道。

少し歩いて…
歩道橋を上がって……

頭から後ろ向きに落ちたんだ。

誰かに押されたわけじゃなく。
事故。

そう、事故だ。

なんだ、あっけない。

僕の人生
短かったなぁ…

よーし、このくらいでいいや。
もう、寝よう…
生まれ変わるとか異世界へ飛ぶとかありえないんだから。

なんかせまいけど。
きっと、棺桶の中なんだ。

んうー…
なんだか、妙にゆらゆらして眠れない。
さっきまで、眠たくて仕方なかったのに。

おかしいなぁ…

そういや、どのくらい考え事してたんだろう？

なんだか、眠いのと揺り起こされる感覚で、頭がぐらぐらする。

でもだめだ、もう睡魔のほうが強い。

ずず……

がしっ！　ドサッ

「いってて……」

「お兄ちゃん！」

「メッシュ、大丈夫！？」

「アッシュは無事だ！母さん、早く走って！急げ、ミリー！」

「わかってるよう！」

うっすらと聞こえた誰かの声も、結局また聞こえなくなった。
多分、もう二度と聞こえないけど。
僕は死んだんだから。

2話。　はじまった日。

はぁ、はぁっ
ばたばたばたばた

「ひゃはははは！」
「諦め悪りぃなぁぁぁ！」
「女子供（おんなこども）がこのマッドドラゴンの足から逃げ切れるかぁ！」

どすどすどすどす！

三匹のマッドドラゴンの背に跨がる人掠いたち。

今、まさに
母子四人の命の危機だ。

がしっ！
「きゃぁ！ママぁぁー！！」

「ミリー！！」
「お兄ちゃん！ママぁ！！」
「きゃぁっ……！」
「母さん！」

妹と母親が捕まってしまった。

「はやくいきなさい、メッシュ！！ミリアーナはお母さんが助けるから！アッシュを頼むわよ！」

「い、いやだ！ミリー！母さん！離せーーー！！」

「だーっははは！イキがいいじゃネェか！」

「上々な家族だな。それに赤ん坊は金持ちに高く売れるんだ。玩具に最適なんだと！」

「うぅ……！」

少年の腕から赤ちゃんの籠をひったくり、マッドドラゴンの鞍に引っ掛ける。

あっさり後ろ手に縛り上げられてしまった少年は、腹を蹴られて胃液を吐いている。

「オラ！」

がんっ！

「がはっ……！げは、げぇ……！」

「最近は男のガキも需要がいいんだ。イイコにして、主の趣向に合えば奴隷以外の待遇が受けられるらしいぜ。」

「結局変態の玩具だろうけどな！」

「「ぎゃはははは！」」

「お兄ちゃぁぁぁん！」

「…げほっ、はぁー、はー…」

「さーて、まずはお嬢ちゃんを大人しくさせるか。」
「……！ひっ……」
「おい、傷物にしたら値が下がるぞ。」
「それは下のほうだろ。この可愛いお口なら問題ないさ。」
「俺も賛成。」
「い、いや……！！」
「虚人（ウツロビト）になるまではしねーよ。ある程度反応するようにしとかないと詰まらないだろ。」
「いい声で喘げばお小遣くれる主もいるらしいからな。ほら、練習だよ。」
「や、やめ……！！いやぁぁぁ！！」
「ミリぃぃーーー！！！」
「やめてーーー！！」

「……ふぇーん…」

「「「…！！！」」」

「あ〝ぁ？…赤ん坊が起きちまったな、早く黙らせろ。」
「ヘイヘイ。」

下っ端の男が赤ちゃんの口に丸めた布を押し込もうとした瞬間。

母子が悲鳴をあげた瞬間。

赤ちゃんが、大声で泣き出した。

「「「近づいちゃダメーーー！！！」」」

「は？」

「びぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーー！！！」

どごぉぉおおお！！

「ごべふっ！？」

『…グォォォオオオオーーーン！！』

「「…………ぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああああ！？」」

突如現れるは…

グララシアベアー

最大体長3メートルを超す、体毛がやや赤い大熊。

「きゃぁぁぁ！？」

「ミリー！母さん！」

「メッシュ！」

グララシアベアーの雄叫びによって、マッドドラゴンはとっくに逃げ出していた。

赤ちゃんを振り落として。

『ゴルルルオオオ！！』

「ひ、ひぃぃぃ！？」

「うわぁぁ？！向こうからも！」

ルマルウルフ

自身よりも大きな獲物しか狙わない、自然界では不可解な狩猟をする狼。

体長1．5メートル程度。

『コルルル…』

ぎらぎら輝く金色の瞳が、人掠いたちに近づく。

「くそう！早く倒せ！！」

「む、無理ですよ！しかもこんな群れ！」

グララシアベアーが親子三頭。ルマルウルフは十頭以上いる群れだ。こんな大きな群れを相手に戦う術など、弱い人間しか狙わない人掠いにあるはずがない。

「！！　アッシューー！」

「や、やめろー！」

人掠いの一人が、赤ちゃんを籠から出し、魔獣に向かって放り投げようとしている。

「いやぁぁぁ！！」

「ほぎゃぁぁぁぁぁ！！！」

がぷっ！

しゅたん！！

投げられるぎりぎり一瞬のうちに。

ルマルウルフが一頭、赤ちゃんに噛み付いた。
「ひぎゃぁぁぁぁ？！！」
噛み付かれかけた男はマヌケな悲鳴を残して気絶した。
「あ、アッシューーー！！」

ぽと。
「う、きゃぁー！きゃっきゃっ！」
『コルルル……くんくん…』
「きゃーぁ！だーぁ！」

「わ、笑ってる…？」
「ほー……よかったわ…」
「うぇぇぇぇーーん！アッシュぅぅぅ！」
「だーうー！きゃぁい！」

ルマルウルフは、静かに赤ちゃんの顔をなめている。
グララシアベアーは、人掠いたちが逃げないように、睨み付けている。
「だぁー、きゃうー。」
『コルルル…』

『グォゥ…』

「すげー…魔獣がアッシュになついてる…」
「鳥や小動物はよく集まってたけど、まさかこんな大きな魔獣まで…」
「アッシュすごい…」

「……おーぃ……」
「？　なんか声がしたような…？」

「大丈夫ですかー？！悲鳴を聞いたと、近くの住人から通報があった！誰かおられませんかー！」

「見て、兵隊さんよ！」
「ここですー！」
「誘拐魔ですーー！」

「隊長、あちらに人影が！」
「！　いますぐ参る！」

人掠いたちか、捕まったのを確認したかのように…

魔獣たちはいつの間にか姿を消した。

……

こんばばば。
ファンタジーというか、ファンシーな小説、はじめました。
次回からギルドとかバトルシーンとか出てきますが、基本ぬるーい冒険小説です（笑）

3話。　メッシュの話。

人掠いの捕縛から一時間くらいあと。
俺たちは、兵隊さんに連れられて　ようやく家についた。
…まったく、散歩と木の実つみのつもりがえらい目にあった…

「父さーん！」
「パパー！」

「メッシュ、ミリアーナ！！」

どたどた、とうるさく飛び出して来たのが父さん。
仕事から帰ったら家族がいないんだから、さぞ驚いていただろうな。
あのうろたえぶりなら置き手紙に気がついてないのかもしれない。

「ガン様！」
「ノリエール！アッシュ！」

「では、我々はこれで。」
「ありがとうございました！」
「また何かありましたらすぐに呼んでくださいね。」
「それではー。」

……
ぎゅうううう！

「よ〝がっだぁ〝ぁぁぁ！！皆無事でぇぇぇ！」
「父さん痛いよー！」

「ま、ママ苦しい！」
「おお、すまん。」
「あら、ごめんなさいね。」

兵隊さんをみおくって。
家に入って早速。
父さんと母さんに抱きしめられた。

「抱き合うんなら二人でやってよ！」
「…お兄ちゃん、もう抱き合ってるよ。アッシュは巻き添えになってるけど。」
「…あ…」

「ノリエール…」
「ガン様…」

「だうー」

「頑張れ、アッシュ。」
「もう少し耐えてー。」

ここは、モノトーン国の城下街。
石と森と畑の国。

自然と創造の調和。
お城は綺麗な石造り。
街には木々と花々か咲き乱れ、畑は青々と芽吹きすくすく育っている。

俺はメッシュ・マルタ。
このモノトーン国の住民だ。

父さんはガンキッシュ・マルタ。
母さんがノリエール。
双子の妹ミリアーナ。
そして末弟アッシュ。

家族五人、仲良く暮らしています。
泣き虫な父さんには参るけどね。

「お兄ちゃんずるいー！パパ、あたしも手、つなぐー！」

結局収穫はなくしてしまったので、買い物に出掛けることになった。

「はいはい。メッシュ、一回手はなしてくれ。」
「やーだ。」
「お兄ちゃんのバカー！」
　べしべし！

「いってぇ！」
「こら、ミリアーナ！」
「うわーん！」
「ミリアーナ、お母さんと手、つなぎましょ。」
「…うん…」

「……母さん。アッシュ、俺があずかる。」
「あら、どうしたの？」
「……別に。」

俺が父さんの手を離した隙に、ミリーが父さんと母さんの手を両方捕まえる。

「べーだ！」
「……ふん！」

俺はお兄ちゃんなんだ。
譲ってやるさ。

素直になる気はないけどな！

「…メッシュの奴め……」
「ガン様、そう言わないの。」

仕方ないじゃんか。
父さんは左腕がないんだから。

「なぁ、アッシュ。」
「だう？」

4話。　ミリアーナの話。

ミリアーナです。
ママとパパは、ミリアーナって呼んでくれますが、お兄ちゃんはミリーって呼びます。
二人とも三歳です。
弟のアッシュは、ねーねって言ってくれます。
かわいいです。

お兄ちゃんが剣の修業を始めたころに、私も魔法の基礎をママから習い始めました。

弟のアッシュはかわいいです。
お兄ちゃんはかわいくないです。
脳筋（のうみそきんにく）です。

パパとママはラブラブです。
パパが左腕を失ったのは、ママを守るためだったそうです。
私たちが生まれる前。
パパはお城の門番をしていて、ママはモンスターハンターだったそうです。
返り血で血みどろになってたママを見て、なぜか一目惚れしちゃったらしいです。

そんな怖いママは、今のママからでは想像できません。
今のママは魔法使いで、すごく華奢な体で、パパはギルドでお仕事をしていて、
筋肉みっしりで、熊みたいにいかつい体です。

不思議です。
お兄ちゃんも、いつかパパみたいになるのかな。
ちょっと将来が面白いです。

……

三話、四話。
双子ちゃんの語り口調でした。
では、次話からアッシュ四歳、双子七歳です。
ここからは基本、アッシュ視点になります。

ミリーちゃんは、お兄ちゃんもパパもママも好きです。
一番大好きなのは弟ですが。（ブラコン）

5話。　ギルドへの道。

……アッシュ四歳、メッシュ・ミリー七歳。

僕…灰十（はいと）が死んだはずなのが四年前。
アッシュ・マルタが生まれたのが四年前。

どうやら僕は、このアッシュとして、生まれ変わったことで間違いないらしいです。

いやぁ……まさか。
漫画や小説ではよく読んだけど、本当に転生できるなんて…
感涙です。
やっほう！！

二歳位までの記憶は曖昧だけど、三歳辺りから前世の記憶が少しずつ戻って来ました。
必要な記憶は名前や挨拶くらいにして、お母さんからお絵かき用にもらった雑紙に書いて、宝物いれって書いてある箱にしまいました。
この世界での読みがなも書いておきました。
やはりこの世界で生きていく以上は、前世の記憶に縛られすぎてちゃいけませんからね。

そんなこんななある日の朝食。

「神々と精霊の御恵みに感謝します。今日の食事が私たちの良き糧となりますようにお導きください。イキタ(いただきます)。」
「「「イキタ。」」」

「ほらアッシュ。沢山食え！」
「ちょっと！何でハムばっかりなのよ。野菜も食べるのよ、アッシュ！」
「肉食わないと筋肉付かないだろ。」
「野菜も食べなきゃ贅肉がついて太るわよ！」

「……多過ぎ…」

山盛り盛られたハムと野菜。
あと卵。固ゆで卵が好きだけど…それは今は良いの。
四歳児の体に収まる量じゃないよ（笑）

それはさておき。
この世界…パレタ大陸では。
星(コスミモザラマンウンデリツリドナメタルリノムーランルルフ)・火・水・木・金・土・風
この七人の神様と従うそれぞれの精霊がつくったとされていて、自然界からものを頂戴するさいには必ず神様と精霊に感謝するのが習わし。
属性名自体単体で神様をあらわして、属性名の後ろに「フェ」をつけると精霊をあらわす。

宗教とかは、マルタ家の場合森の近くにに住んでいるので「ツリドナ教」となる。
それぞれ宗教は結婚や引越しなど、環境で変わるらしい。
つまり、都会に住んでたら、メタルリ教やコスミモ教になるってわけ。

そのせいか、宗教がらみの戦争は無いらしい…
ま、本で読んだだけなんで、詳しくは不明。
まさか、四歳児がそんなこと気にしたりしないしねぇ…不自然になっちゃう。

ところで。
お父さんはギルドの仕事で昨日から家に帰って来ていません。
ギルドの職員で、期日ぎりぎりの依頼をこなしたり、受付をしたり。
隻腕でありながら難無く依頼をこなす父の背中は、僕たち兄弟の目にしっかり焼き付いています。
今、僕ら三人、お母さんからの話に夢中なんですから!。

「え、私たちもギルドにいけるんですか!?」
「そう。ジュニアギルドの受付が明日から始まるの。五歳以上からなら入れるそうよ。」
「やったー!」

兄姉は、きゃいきゃい喜んでいる。

両親とも、ギルドに登録しているので、細かい情報もすぐ入手できるのがうれしい。

けど…五歳以上かぁ…

「いいなぁ…」

「あ、アッシュももしかしたら入れてもらえるかもしれないし、一緒に行こうぜ！」

「そーよ、アッシュ！」

いや、無理でしょ。

四歳ですよ。

ダンジョンになんかお使い行けませんよ。

いや、お使い違うけど。まずダンジョンてオイオイ　（笑）

イメージそんな感じだよ、ギルドって。

「はいはい、そこまで！」

ぴたっ。

お母さんの声で黙る。

「まずその前に、抜き打ちテストをしますよ。」
「「「「え？」」」」

「か、母さん…？」
「えーと…」
「……（はぁ…）」

つまり。
ギルドでやっていけるか、いきなりなんか得意なことをやってみなって事だ。

と、いうわけで現在地は
外側の門のちかくの…俗に言うフィールドで、スタンバイ。

なお。
外門からフィールドへ出る際には、必ずギルドカードや身分証明ができるものを所持していることが条件。
僕たち兄弟は家族証明を国から発行されています。

「よっしゃ、俺からいくぜ！」

メッシュは、十歩ほど離れたところにある大岩の前に立った。

…ひゅぃっ……

ぱきっ。

ずごしゃぁぁ！！！

ずしーーん……

「うわー、うわー！すごいすごい！」

「な、何回切ったかわからなかった…」

「……」

お母さんは黙っているまま。

「つぎ私！」

今度はお姉ちゃんが、崩れた岩の前に立つ。

「…地精霊（ノムーラ・フェ）よ、風精霊（シルルフ・フェ）よ、かしこり集え、つなえつなえ、つなえに

申す……そがた、オロイ（真実の姿）にもどりたまやせ！！」

がこがこがこ…
ぼこんぼこん！　めこめこめこめこ……！

「すごーーーい！」
「元の大岩に　戻った！」

若干小さく見えるのは気のせいとして。
お姉ちゃんの足元に少し荒い砂利があるのは気のせいとして。

もとどおりにもどった。　（ほぼ）

「うん。二人ともなかなかね。いけるんじゃないかしら。」
「「よっしゃ！」」

「さて。次はアッシュね。」
「へ？　ぼ、僕も！？」

「当たり前じゃんか。」
「一緒に行くのよ、当然でしょ。」

「ぇ、ぇぇぇぇぇぇぇ？？？」

ど、どうしよ…
得意なこと…

わたわたとポケットをあさると

「あ！」

去年作った、木の枝と鳥の羽毛でできた笛を見つけた。
木の精霊様に感謝して作った笛。

こいつ、ちょっとすごいんだ！
お父さんにだけ見せたけど…
お母さんもお兄ちゃんとお姉ちゃんにもまだ披露してないぞ。
これなら…

「モンスターを呼んで、外壁を5周してきます！」

6話。　ルマルウルフとアッシュ。

ぴゅぃーーーー！
ぴっぴぴぴぴーーーー！

思いっきり強く笛を吹く。

「もっモンスターを呼ぶだってぇ！？」
「いや、でもアッシュなら…」

「…面白そうね。」

チラッと見たお母さんの顔がめちゃ怖い。
笑ってるんだけど怖い！

……だだっだだっだだっだだっだだっだだっ……

ずしゃ！

『コルォオオオオーン！』

「「のぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！？？」」

おお、ハモッた。
さすが双子。

「ルーナン！今日もきてくれたね！」
『コルルルゥ！』

べるべるべるべるべるべるべるべる

「ちょ、ちょっと…うぶぷ…」

すっごいいきおいでなめられる。
これもあうたび毎回のこと。
すんごいよだれ…

ルマルウルフ。
お父さんとお母さんから聞いた、僕を助けてくれた狼。
…なんだと思う。
すっごくなつっこい　ってわけじゃないけど

どうやら心を許してくれてるみたい。
だから多分、このコがそうなんだと思ってる。

とはいえ、初めて笛を吹いた時にはびっくりした。
鳥を呼ぶ笛くらいにしか思ってなかったから…
お父さんは大笑い。
きっとすぐ分かったんだ。
これが僕の能力(ちから)だって。

僕と同じくらいの背丈だけど、これでもまだ子どもだったらしい。

日中いっぱい遊んで、夕方帰っていく。
飼われるつもりはないらしい。
ちょっとさみしいけど…こうやって遊んでくれるのは素直に嬉しい。
ウサギ?をくわえてやってきたときは死ぬほど驚いたが…

「よしよし…今日も背中のせてくれる?」
『ルォン!』
「よし、いこう!」

ふせをして、僕がしっかり乗ってから立ち上がる。

「いってきまーす!」

「ちょ、ちょっとアッシュー！」
「すっげー！かっこいーーーっ！？」

風が気持ち良い。
もう、２週目だ。早い早い！
実はこっそり門から出て、時々こうやって背中に乗せてもらってた。
だから本当はもうなれたもの。
でも、五週はさすがに多すぎたかな…
ルーナンの息があがってきた。
まだ子どもなんだから…

そんなこと考えてたら。

「あ！」

ぼたっ！

『クオン！』
「いたた…」

結局落ちちゃった…

「きゃぁぁぁぁーーー！」

「アッシュ！」

「へーきへーき！」

ルーナンがすぐ起こしてくれたから砂まみれになっただけ。

ふっと、影がかぶってくる。

「アッシュ。」

「お、お母さん…」

多分、だめだなぁ…

来年まで待つか。

ぎゅぅぅぅぅぅぅ！

「すっごいじゃないの！んもぉー！お母さんびっくりしちゃったわよぉ！」

「んぶ！」

おっ　おっぱいが！

やわらかいけど苦しい！

「アッシュ！」

「すげぇじゃねーか！」

「お、お兄ちゃん、お姉ちゃん…」

「「やったじゃん！」」

「あ、ありがとう…」

『クルォン！』

「ルーナン…ありがとう…！」

『クルルルル…』

べるん！

「うぶっ」

「「あはははは！」」

たたたっ　がざざ…

『またね！ルーナン！』

「さぁー、忙しくなるわ。準備準備！」
「「はーい！」」
「はい！」

夕方…

「そっかー、母さんがＯＫ出したんならいいんじゃないか？頑張れよ。」
「「「はい！」」」

「アッシュも多分大丈夫よね？」
「おー、いけるんじゃね？ま、大丈夫だろー？」

のんきに返事をして
器用に右手だけでチキンプーガのグリルをくるんでいる紙をはがす
お父さん。
かぶりつく姿はホントに熊みたい。

でも、わかってる。
本当は内心そわそわしっぱなし。　目が泳いでる。

わかりやすいなぁ、お父さん。

「ほらアッシュ！じゃんじゃん食え！」
「そーだぞアッシュ！ほらがぶっといけ！」
「パパ！お兄ちゃん！　だーかーらー！野菜も食べさせなさい！」
「あらまあ。　アッシュ、とりあえずパン食べなさい。」
「ママぁ！」

「…多すぎ……」

結局、いつもどおりな食卓。

でも、こういうのが幸せなのは
前の世界と同じだなぁって、うっすら思い出してた。

7話。　ジュニアギルドへ行こう！

ジュニアギルド　開場当日。

「パパ…ここ？」
「う、うぉぉぉ…」
「わー、人がいっぱい！」
「ようこそ！　冒険者ギルド併設　ジュニアギルドへ！」

無駄にテンションの高いお父さんに迎えられて
僕たちはジュニアギルドへやってきました。

「ほれ、入ったはいった！」

「おわわっ」
「ひゃぁっ」
「わたたっ」

「受付カウンターは向こう、依頼の掲示板はあっち、配達の依頼はカウンターで申し込みすれば一緒にもらえるからな。じゃ、がんばれ！」

ばん！
「いで！」

「もぅ、パパったら…」
「ぷぷっ…」

「こんにちはぁー。ジュニアギルドへーようこそー。」

間延びした声のお姉さん。

「三人で登録して欲しいんですが…弟が４歳なんですけど…」
「はーい、お兄さんたちはぁ、５歳以上ですかー？」
「は、はい…」
「はーい、問題ございませーん。リーダーが五歳以上の場合、メンバーは大げさに言うと０歳からでも登録できまーす。」
「そ、そうですか…」
「はぁーい、他に質問はございませんかぁー？無ければすぐに登録を開始いたしまぁす。」
「は、はい…」

「それではぁ、まずリーダーさんからぁ、こちらの水晶球に身分証名称と手のひらを当ててくださーい。」
「俺で良い？」
「「うん。」」

おそるおそる…
乳白色に光る水晶球にメッシュ兄ちゃんが手を当てる。

ビウォォォォン…
プシュー！

虹色に一瞬光り、横の箱からカードが出てきた。

「…はぁーい。メッシュ・マルタさんで間違いございませんねぇ？」
「え、なんで…」
「こちらぁ、国から発行された身分証明と指紋照合で本人確認を行います水晶でぇす。偽装や変装は通用しませぇん。ジュニアギルドでも冒険者ギルドでも同じ水晶球を使用しまぁす。なのでぇ、このギルドカードは絶対本人にしかご使用いただけない大切なギルドカードになりまぁす。」
「へぇ…すげぇ…」
「ギルド登録された場合、身分証明で使用していたカードはこの水晶球が回収いたしまぁす。また、こちらはジュニアギルドですのでぇ、１５歳になられましたら卒業となりましてぇ、いったん退会していただきますぅ。冒険者ギルドへ再登録される場合はまた同じ手順を踏んで登録となりますー。そのままギルド入りせず学校や就職をなさる場合は身分証明を水晶から返却いたしまぁす。」
「はーい。」
「あ、そうそう…チームリーダーさんのカードにはリーダージェムが装着されていまぁす。ちゃんとありますかぁ？」
「はい、これですね？」

お兄ちゃんのカードには、水晶と同じ乳白色に光る小さな石がはまっている。

「はぁい。それではぁ、次お姉さんどうぞー。」
「は、はいぃぃ…」

緊張しっぱなしのお姉ちゃんも無事に登録完了。
「それではぁ、弟さんどうぞぉ。」
「はい！」
ゆらゆらとうごめきながら光る水晶。
手を触れた瞬間、虹色に光る。
ぱしゅん！
持っていた身分証明書が水晶に吸い込まれる。
ウ〝ォォォォォン…
プシュ！
出てきたのはオレンジ色のカード。
かっこいいなぁ…
「はぁい、これで登録は完了でぇす。それでは最後に、三人のカードを重ねてくださぁい。」
「？」
カウンターにお兄ちゃんのカードに僕とお姉ちゃんのカードを重ねる。
「はい。」
ぺたん！

「このハンコでぇ、三人がチームである証明となりますぅ。」
「あ、見て見て。マークが欠けた形になってる。」
「本当だ、三人とも別々…」

冒険者ギルドの看板のマークが、少しずつ欠けた形になってる。
下には「ジュニア・・・」とかいてある。

あー…説明しずらい。
英語で書く「Ｊｒ．」みたいなもの。
こっちの文字、なれてきたからいいんだけど…
所どころ、英語とダブるのがあるんだ。

ＯＫ　とか、ヘイ！とか…

万国共通？

「三枚のカードを重ねるとちゃんとしたギルド公認マークとなりますぅ。メンバーが増えた際は、またどこのギルドでも結構ですのでぇ、ハンコを押しなおしてもらってくださぁい。」
「「「はい！」」」

「それでは登録完了でぇす。依頼を掲示板から選んでくださぁい。」
「はい！」

ずらーーーっとはられた依頼の書類。

『マーブルジェム、採掘依頼』『レンコンムシ、捕獲依頼』『イワモグラ、討伐依頼』

などなど…

「どうするかなぁ…」

「お兄ちゃん、これなぁに？」

「んー？　あぁ、これは依頼じゃなくて討伐頭数に応じて報酬がもらえるやつだね。」

隣にあったカバーのかかった掲示板。

こっちのは、はがさないで見るだけらしい。

「これは、こうやって…」

お兄ちゃんがカードをかざす。

ピー、プシュ。

「これだけでいいんだよ。」

「へー…」

「さて、依頼は…」

一通りカードに入力を終えたお兄ちゃんが掲示板のほうに戻ってきた。
「お兄ちゃん、これどお？」
「『キング・ビー、クイン・ビー　討伐依頼』…　へー…」

『　キング・ビー、クイン・ビー　討伐依頼　』
森に大きな蜂の巣が出来て困っています。
子蜂がたくさんいるので怪我人も出ています。
兵隊ビー討伐と一緒にお願いします。
依頼人：ジュニアギルド管理員
期間：無制限
報酬：キング・ビーのクラウン、５００リム。
　クイン・ビーのティアラ、６００リム。
補足：兵隊ビー討伐も一緒にお願いします。
　兵隊ビー一匹・２０リム。

「ほほーう…」

１リムは１０円くらい。
なので、蜂一匹で２００円。
キングは５千円、クイーンは６千円だ。

「いいんじゃね？」
「いいよね！」
「い、いいの…？」

なんか不安なんですけど…

「「よっしゃ！！おねがいしまーーす！」」
「ほ、本当に大丈夫なのーーー！？」

「「気にするな！やるんだよアッシュ！」」
「えええええええーーーー！」

8話。　蜂退治。

ぴぃー
ぴょろろろろー…
ぴぃぴぃぴぃ…

小鳥がさえずる。

ごろごろごろごろごろ…
…ぶふーぶふー……

荷台が揺れて行く音。

場所はモノトーン国から南東の森。
運よくロバ二頭引きの荷台に乗せていってもらい、すぐついた。
大きな赤いジョロキアキホーテ…馬みたいだ。

「もうすぐポイントさ、つくどー。」
「ありがとうございます、マードさん。」
「最近は、こだらわぎゃざぁー（若過ぎる）者も冒険者さなるだが。将来頼もすぃなぁ。」
「今日からジュニアギルドが始まったので、どんどん子供たちが冒険者になりますよ！」
「はっはっは。それはありがでぇ、オラもなんか依頼しようがね。……あぁ、入口ついたで。」

「「「はーい。」」」
「気ぃつけでなぁ。」
「ありがとうございました！」

「えーと…この黒いポイントツリーが、はぐれたときの目印だね。こーやってカードに登録しとくんだって。」
「こう？」

森に入ってすぐの小さなスペースにある長くて黒い杉…に似てる木。メッシュ兄ちゃんが、カードでギルドの説明書と木を交互に叩きながら説明する。

ピー……
ピコン。
【集合地点ヲ登録シマシタ。】

「「おおぅっ！」」
「カードがしゃべった！」

【ぎるどかーどノご利用アリガトウゴザイマス、リーダー・メッシュ様、ナラビニめんばーノ皆様。ワタクシ、フィールド専用さぽーとめかノ、「フィサモ」と申シマス。ヨロシクオネガイイタシマス。】
「よ、よろしくお願いします…」
【ゴ丁寧ナ対応、アリガトウゴザイマス。ワタクシハ、「金属精霊（メタリモ・フェ）」の加護ニヨル相互通話機能ヲ所持シテオリマス。ご質問ガゴザイマ

シタラ、マタかーどヲノックシテ呼ビ出シテクダサイ。】
「は、はい…」
【ソレデハ、オ気ヲツケテ、イッテラッシャイマセ。】

ピー、プチ。

「あー…」
「……はー……」
「……へー…」

「…行くか。」
「「……うん…」」

周りを見渡せば…小動物が木を駆け登ったり、こちらを見つめていたり。
今の所蜂の姿は見えてこない。

「ミリー姉ちゃん、兵隊ビーの中でも近衛兵隊ビーが作るロイヤルゼリーって、特に美容にいいらしいよ。ほらここ。」
「へー…ロイヤルゼリーだけを食べて育つとクイン・ビーになるんだ…ふーん…いいわねこれ。最優先で収穫するわよ！」
「はーい。」

「お前ら本読みながら歩くなよー…いきなり襲って来たらどーすん

だよ！」

……がさ！

…　ブブブブブブブブブブブブ　…

「……でたぁぁぁぁぁ！？」

「兵隊ビー！警戒区域に入ってたんだわ、アッシュ構えて！」

「あわわわわ！？」

ギャリン！

しゅぴん！

ぱしぃっ！

「どうりゃぁぁぁぁぁぁぁ！」

ズバッ！　ぐしゃっ！

「火炎障壁（ザラマン・シルド）！」

ぶぉぉぉぉぉぉ！

「やぁっ！」

しゅぱん！　ぎゅるるる…

「ぶっ飛べぇぇぇぇ！」
しゅぽーーん！

ブブブブブ…

「二、三匹逃げたか…」
「羽と針集めたら移動しましょ。大群に来られたら厄介だわ…」
「わかった！」

手早くムチを回収して、すぐに短剣でメッシュ兄ちゃんたちが倒した兵隊ビーから羽を切り取る。
針は毒耐性のあるミリー姉ちゃんが回収する。

「しかし使い方、うまいよなーアッシュのやつ…」
「は？」
「ムチだよ。薙ぎ倒すのも放り投げるのもあっさりマスターして…」
「…そうね…武器、選ぶ前に『ムチがつかいたい！』って先に言ったんだもんね…不思議なことってあるのね……」
「不思議で片付けていいのかなぁ…」

「兄ちゃん、姉ちゃん！おわったよー。」
「おー、こっちもだ。移動するか。」
「うん。」

ざっ

…ざざざざざざざざざざざざざざざざざざざ……

「わ？！」

足元でアリ？やらトカゲやら…
色んな生き物が擦り抜けていく。

「な、何……？」
「…やばいな…殺気が二つ…」
「…………！」

ブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブブ
ブブ！

「おいでなすった、キングとクイーンだ！」
「「ぎゃーー！大群ーー！！」」

…　カッカッ！

「フィサモ！」
【ハイ、メッシュ様。】
「今回の依頼はクラウンとティアラを持ち帰るだけでもいいのか？」
【…検索中…ハイ、討伐依頼デスガ、きんぐトくぃーんハ王冠ヲ失ウト、ろうデ新シク作リ直スマデ巣カラ出テコナクナリマス。約一年間ハ、大丈夫デス。】
「…よし、サンキュ！聞こえたな二人とも！王冠をたたき落とせ！！」

「「お、おーー！」」

ブブブブブブブブブブブブブブブブブブ！！

「でいやぁぁぁぁぁぁ！」

ばきばきみしみしみしべキバキパキポキベキ！

「木精霊（ツリドナ・フェ）！　力をかしてくれぇえええ！」

ざわざわざわざわざわざわざわざわ…

…みしみしぎしぎしぎし…

「棘刺包囲網（ニードルネット）ぉお！！　んでもって、再起不能斬ぃぃぃぃぃ！」

兵隊ビーの大群を相手にしているメッシュ兄ちゃんのほうから…あんまり聞きたくない音がする…

耳ふさいどこう…

「火精霊（ザラマン・フェ）！お力を！！　炎上大砲槍（ケルビナスピアー）！」

ずづづづづづずずづどどどどどっどどぉおおお！

ブビビッビイィィイイ！

巨大な炎のヤリが、兵隊ビーをクイン・ビーとキング・ビーから引き離す。

「アッシュ！今よ！！」

「風精霊（シルルフ・フェ）！発動ぉぉぉぉおおお！！」

どひゅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！

兄ちゃんと姉ちゃんがどかどかやってる間に仕込んでおいた魔法を開放する。

「竜巻陣（トルネイド・エリア）」　そのまんま、決めた範囲の中で竜巻を発生させる魔法。

「…届け！」

ぴしゅん！　ぱしん！！

ゴロロン…

【……！！！！！！！！！！！！】

王と王妃が一目散に逃げていく。
つられるように、兵隊たちも逃げていった。

「「「やったぁあああ！」」」
「王冠ゲット！」

蜜蝋でできた、クリーム色に輝くクラウンとティアラ。

【オメデトウゴザイマス。初クエスト、くりあーデ、ゴザイマス。】
「いよっしゃぁあああ！」
「ばんざーい！」
「やったやったぁ！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

初クエスト。

『　キング・ビー、クイン・ビー　討伐依頼　』

クラウン・ティアラの入手により、クエストクリアーとする。

9話。　ただいま！（前書き）

大変失礼いたしました…
なぜか同じお話が二つ続いてました…すぐ対応できなくてすみません（汗）
報告ありがとうございます！

お気に入り登録１５件！ポイント５０点！
いつのまに…ありがとうございます！がんばります！

9話。　ただいま！

・ガンキッシュ視点

うろうろ…
…じー…
すたすたうろうろ…

「ノリエール、ちょっと落ち着け。」
「……はい…」

夕方になってからノリエールは、部屋の中をずっとうろうろしていた。

今は、なんとか洗濯物をたたもうとしているが、手が震えている。

ぎゅ。

「ガン様…？」
「心配なのはわかる。でも信じてやろうよ、な。」

後ろから抱きしめる。

「…そんなこと言われても…」
「大丈夫。」

「もう夜になるわ…こんなに遅くなるような依頼は、ジュニアギルドに行かないようになってるはずじゃなかったんですか…？」
「まだ日は落ち切ってない。」
「あの子達、無茶してなきゃいいけど…怪我してないかしら…あぁもう、今更心配になるなんて…私の馬鹿！！アッシュなんてまだ四歳なのに…！」

「…ノエル！」
「！？」
　びくんっ！

「命令だ！　俺の話をちゃんと聞きなさい。」
「は、はい！」

慌ててこちらに向き直るノエル…

「ノエル」は、二人きりの時だけの大事な呼び名。
「命令」は、パニックになったノエルを黙らせるときにだけ使っている、行動制止のための魔法の言葉。

「メッシュはちょっと頭が弱いが、素直ないい子だ。決まりはちゃんと守る。　ミリアーナは賢いし、仲が悪そうでもちゃんとメッシュをサポートしてくれる。機転の利く子だ。　アッシュはあの二人をうまくコントロールできてる。本当に自分の役割を理解してるよ、年不相応で恐ろしいくらいな。」
「ガン…さま…」
「大丈夫だ。　俺たちの子供だぜ？心配いらねぇ。」

「……は、い…」

そっと髪をなでてやればようやく少し落ち着いてきたらしく、額を肩に押し付けてくる。
外では平気に俺のことを「ガン様ー」なんて呼ぶくせに…
二人きりだといつまでたっても素直に甘えてこない。
そのノエル唯一の甘えているしぐさ。

触れている場所に血が、熱がこもらない筈がない。

「ノエル…」
「…ガン様……」

そっとお互いの顔を近づけ…

ばたーん！

「「「「ただいまーーーーー！！」」」」

ごちん！！

「「「い〝っ！？」」」

「親父、お袋！見てくれよこの初報酬、すげーぞ俺ら、やったぜー！」

「パパ、ママ！聞いて聞いて！話したいことがいっぱいあるの！」

「お、おう！おかえりー！」

「…おかえりなはい…」　（↑唇切れた）

「…ごめん、お父さん…なんかお邪魔だったみたいだね……」

「……空気読めるのお前だけだな、アッシュ…」

双子のすごい剣幕に圧倒されつつ…

やはり、アッシュの異質さに驚かされた。

「でね、でね！もうアッシュの機敏さがかっこよくて！絶対将来い

い男だよ、我が弟は！」
「アッシュはよくくらいついてきたよな！弱音ひとつ吐かなかったぞ。」
「そ、そうなの…よくがんばったね、三人とも！」
「「うん！」」

10話。　アッシュとガンキッシュ

「どりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ガシン！　キキン！　カァン！　カン！

「水精霊（ウンデリ・フェ）、かしこり集え、つなえつなえ、つなえに申す…　霧雨噴（スプラッシュ）・杖波（ワンド）！！」

ずぷしゅぅぁぁぁぁ！

「土精霊（ノムーラ・フェ）、お力を！　岩蚯蚓（ロックドワム）Ｊｒ．召喚！」

ぼこん！

「はい、そっち側耕してね。」

『こくん。』

…ぼこぼこぼこぼこ…　ごろごろ…

「すまねぇだぁ、皆さん。」

「いえ、息子たちがお世話になりましたから…」

「皆ー！冷たいお茶を持ってきたわよー！お昼にしましょー。」

「「「はーい！」」」

この間、荷台にのせてもらったマードさんの畑のお手伝いにやってきました。
くはー！お茶うまい！

「ほら、二人ともたくさん飲んでおきなさいよ。ミリアーナは特にすぐ魔力無くなっちゃうんだから。」
「うん。」

母さんが持ってきたお茶は、魔力を回復するマリマリ草がたっぷり入ってる。
そのままだとかなり苦いけど、お湯にくぐらせると甘みが出てくるんだ。
お茶にするのは時間かかるはずなんだけど、母さんだとなぜか短時間に作っちゃう。
魔女のカンってやつらしい…
やっぱりすごい魔法使いなんだなぁ…

「ガン様、はいあーんv」
「…やめてくれ…」

はい、そこのバカップルはおいといて。
…ってオイオイ、結局口あけてるよ。

フルーツサンド、うまーい。

そういやこの世界の魔法について、説明してなかったっけ。

今の畑仕事中や、この間の戦闘中のように、精霊に力を借りて発動するのが基本。
巨大な魔力を放出するときは、神様に力を借りる場合もある。
そのときは、大人数で呪文を唱える。

通常使える魔法は、姉ちゃんのように神様に精霊を借りることを伝えてから呪文を唱える。
そのため呪文は長くなる。

戦闘中…というかフィールドに出る際は、事前に神様から精霊を借りる魔法を唱えて準備しておく。
で、力を貸して欲しい旨を声に出して、発動したい魔法を唱える。
こうすることで、短い呪文で力を貸してもらう事ができる。
借りる魔法は
「属性の神々よ、お力添えを。精霊七属（エレメントリー・セッティェ）。」

これも、神様にお願いする呪文だから、チームを組んでいる場合はチーム全員で唱える。

「アッシュ、ちょっとこい。」
「んぅ？」
「ああ、食いおわってからでいいぞ。ノリエール、　イアキタ（ごちそうさま）。」
「あ、はーい。」
「（うぐうぐうぐ…）　イアキター！」
「これ、ちゃんと口をふきなさい！」
「はぁい…」

「どうだった、違和感あるか？」
「ううん、全然。すっごく使いやすい！」

父さんからもらった脚輪。
召喚魔法を使う際に便利な『マジカアンクレット』
小さい召喚獣だけしか呼び出せない欠点はあるけど、これがなかなかいい。
今日だけでも５種類は召喚獣を呼んでいるのに、全然疲れない。
召喚中にダダ漏れになってしまう魔力の放出を最小限に抑えてくれるんだ。

「いけそうだな。よーし、上に掛け合ってみる。」
「大変だね、お仕事。」
「まーな。モニター調査だけど、母さんは召喚魔法は体質的に合ってないし、あの兄貴に姉貴じゃ不安で…お前が一番安心できるよ。」
「姉ちゃんは魔力を無駄に使っちゃう体質だもんね…兄ちゃんはちょっとアホだし…」

あははーと、父さんに合わせて笑ってみる。

「それなんだよ。」
「え？」
「ずっと気になってた。　お前、誰だ？」

「…え……？」

「いや、すまん。転生者だろ？前世の記憶の残ってるタイプの。」
「？？！」
「あれ？そんなにびっくりすることか…？」
「いや、ちょっと待って！父さん！！　なんで分かるの！」
「そりゃぁ、お父さん特殊だもんよ。超視（みえ）るんだ、前世の影が。」
「か、影？」

自分の影を見ても、普通の影。

「アッシュの小さい影と別に、メッシュたちよりも大きい薄い影が被ってる。もう一人そこにいるかのようにな。　これが前世の記憶を持っている人間の特徴で…お父さんはそれが見える体質なんだ。」

びっくりした。
本当に、知ってるんだ…

「…ここと違いすぎる世界、場所に生きてた。魔法も転生も、剣も。何も無い世界だよ。」
「……は？　どうやって生きてきたんだ？」
「治安は安定してて、事故や殺人以外では人が死んだりしないよ。

モンスターもいないから丸腰で外を出歩けるんだ。　警察っていう…兵隊さんみたいな人たちがいるの。事件や事故はその人たちが解決してくれる。」
「すげえな。　で、キミは、どんな人間だった？魔法が使えないなら農業とかで働いてたのか？」
「１４歳だったから、学校に通ってたよ。僕の世界では、兄ちゃんたちくらいの年になったら学校に通うことが義務づけられてるんだ。たくさんの子どもが通ってたよ。　もうちょっと大きくならないと働くことは出来ないんだ。家事の手伝いなら出来るだろうけど、それ以外でお金を稼ぐことは出来ないから…」
「へぇ…」
「魔法の変わりに科学があったよ。　この世界のメタリル教にちょとだけ近いかな…」

「この世界では転生は当たり前なの？」
「おう、死ぬと必ず生まれ変わる。人間以外もあり得るけどな。多分、アッシュ…の前世の人間と誰かが同時に死んで、魂が混ざったのかもな。自分以外の記憶はあるか？」
「…今のところ、覚えは無いけど…」
「二重人格とかの人間は、魂が中途半端に混ざって、魂が二つあるような状態で　生まれ変わった人間なんだ。そういうこともあるから…確認しておきたかったんだ。　そうか、よかった…」
「…？」
「いいんだ。で、キミは…これからもアッシュとして、俺の息子として接していいんだよな…？」

不安そうな父さんの顔。

「大丈夫だよ！　僕は父さんと母さんの子どものアッシュ・マルタ。何も変わらないよ。」

「…ありがとう……　いこうか。母さんが心配する。」

「うん！」

１１話。　迷子の捜索依頼。

すっかり夏になりました。
毎日暑いです。

……んぎじゃじゃじゃじゃじゃ…
…じょいわじょわいんじょじょじょじゃじゃ……

虫うるさっ！

でも、モンスターじゃないし、やっつけるわけにいかないし、外なんだから意味ないし…

「鎧脱ぎたい…」
「ローブ暑い…」
「氷食べたいね…」
「……本当になぁ…」
「魔力の無駄遣い禁止ー。……あつーい…」

文句たらたら、今日もギルドの依頼です…

『迷い人、捜索依頼』

今向かっているのは、その迷子になった親子の住んでいた村です…

「ずいぶん深くなってきたなぁ…」
「……えーと…ああ、これだわ。いきましょ。」

小さな石を沢山詰み上げ、二対にした山がいくらか間隔を開けて並んでいる。
その間から、砂利をどかして雑草を抜いただけの簡素な道が見えた。

「あー、やっとついたー！」
「鎧、早く脱ぎてぇ…疲れたぁ…」
「暑いぃ…」

「お暑い中、遠路遥々おこしいただきまして…ありがとうございます。」
「手厚いおもてなし、ありがとうございます。」

ヤコウ村。
村人達は、皆フードを被っていて、目元以外を隠している。
暑そうだけど、これが正装なんだって。

長老宅は、茅葺きっぽい屋根に土壁の家。
意外と風がとおり涼しい。

しずしずと、お茶を運んでくるお姉さんも深いフードを被っている。手袋もしてるよ…

「粗茶でございます…」
「ありがとうございます。」
「わぁ、このお菓子おいしーい！」
「ちょ、ちょっとアッシュ、コラ！お行儀悪いでしょ！」
「ははは、元気ですなぁ。」
「すみません…」
「いやいや、むしろありがたいですよ。…元気な声が村に聞こえるのはもう何ヶ月も久しぶりですからなぁ…」

「「……」」
「……（もぐもぐ…）」

まいったなぁ…
子供らしく振る舞っても、こんな空気じゃさすがに黙るよ…

「…あ、あの…迷子の親子についてなのですが…」
「はい、私の娘と孫娘なのですが…狩りを教えに行くと森へいって…そのまま…帰ってこないのです…もう半年になります…」

「…わかりました。　何か、お二人の持ち物を貸していただけませんか？同じ気配のする方向を探す魔法を展開します。」
「！　い、居場所がわかるのですか！？」
「……わかるのは方向までです。通りすぎたら向きが変わりますからまたそこから方向を探します。しばらくはその繰り返しになるかと…」

「そうですか…君、部屋へ案内して差し上げて…」
「はい。…こちらでございます。」

通された部屋は、モンスターの毛皮で作ったベットがあるだけの、簡素な母親の部屋。
そのお嬢さん…つまり、お孫さんの部屋も、似たような作り。
ただ机と本棚があって、机の中には小さな箱があった。でも中身は空っぽ。

「若奥様もお嬢様も、持ち物に執着される方ではありませんでした。不要になればすぐに捨て、身の回りにはいつも必要なものしかありません。」
「徹底してるのね…」
「若旦那様がお亡くなりになってからの若奥様は、お嬢様以外のものに全く興味を示していませんでした。…ようやく食事もとられて、少しずつ笑顔が戻り、狩りがしたいと言い出したときには、皆喜びました。」
「狩り？」
「そうか、ヤコウ村は狩猟民族なんですね。だから村中に革製品や牙とかが沢山あったんだな…」
「はい、私達のヤコウ村は狩猟民族が集まり出来た村です。病人でも、狩りが出来るまで回復すればもう大丈夫だと安心できるものでした…なのに…若奥様もお嬢様も、帰ってこないのです…」

「どうしてもっと早く捜索依頼を出さなかったの？」
「あ、アッシュ？！」
「…この森では、外界との接触が極端に少ないので、町の大人達には警戒されてしまったようなのです…説明は村へきてほしい、と印してあったのも裏目に出たようで…」
「依頼は出してたんだ。」
「ハイ、そして今回ようやく…あなた方が来てくれました。ありがとうございます…大旦那様も大奥様も、きっと…どんな結果であれ……元気を取り戻してくださいます…」
深く頭を下げたお姉さんは、エプロンをぎゅぅぅっと握りしめている。
きっと、その若奥様とお嬢様が大好きだったんだ。

「…姉ちゃん、兄ちゃん。」
「「ん？」」
「見つけようね。」
「「当然よ。」だぜ。」

ミリー姉ちゃんは、お孫さんの部屋から持って来た小箱と、母親の部屋にあった枕もとのロウソクに、風系探知の魔法をかけた。
どうしても行きたいと言う長老さんを連れて、森を捜索する…

しかし
気配を探して森を歩き回り約二時間…
どちらにも反応がでない。
深い崖、険しい谷、土砂崩れのあった場所…
手掛かりは何も見つからない。

姉ちゃんは既に顔色が悪い…魔力の使いすぎだ。
マリマリ草のお茶もお腹がいっぱいで飲めなくなって来たみたい…

「姉ちゃん、代わるよ？」
「……ま、まだ大丈夫、アッシュは戦闘要員なんだから、警戒を続けてなくちゃ。」
「…うん……」
「ミリー、マリマリ草の蜂蜜漬け…口に入れとくだけでも違うだろ。かじっときな。」
「う〝……ありがと。……ぐあ〝ぁ、苦いぃぃぃ…」
「あわわわ…」

姉ちゃんの魔力切れよりも先に、心が折れそうになってた時。

…プィィィィ…

「……ん？」

「あっ！」
「あ、ああ！？」

「「「反応でたあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」」」

「メッシュ！もっとマリマリ草！お茶も！」
「おぅ、詰め込め！」

「（ばくばく…ごくごく…）おぐぇぇぇ……げふ…よし、行くわよ！」

「「おーー！」」

「長老、背中のってくれ！」
「アッシュ、モンスターの気配に気をつけてて！」
「ラジャー！」

…ばたばたばたがさがさがさ…

小箱がカタカタ反応している。
ひたすら微弱な気配に不安が溢れ出しそうになる…
ただ、気掛かりなのは…

蝋燭がなに一つ微動だにしないこと…

親子なら、きっと二人でいるはずなのに…

まさか…

辛い予想が頭を過ぎる…

「近い！このあたりよ！」

「ライリエナー！」

「ライリエナさーん！」

「アグエナさーん！」

「返事してー！」

何もかえってこない。

「ライリエナ…」

がさがさ…

「おい、ミリー！なんかいる！でかい…！」

「…こ、こんなときに…！！」

「……違うよ。」

「え？」

『ニャォゥ…』

『クルル…』

「ルーナン！ライ！！」

「な、なぁんだ…あんた達か…驚かさないでよ…」

「よかったぁ…」

ルマルウルフのルーナンと、今日仲良くなったばかりのサンダーブリッツキャットのライ。

灰色の毛並みに金目のルーナン。

紺毛に黄色いラインが栄えるライ。目は赤色。

村へ行く途中でであったから、ルーナンに任せて後で迎えに行くつもりだった。

「ら、ライリエナー！！」
『にゃぁぁぁぁ！！』

長老が、ライにとびついた。

「……は？」

「ああ、まさか獣姿になってしまっていたとは…力を使い果たしてしもうたか…アグエナはどうした？」
『ミャァ…うにゃぅぅ…ミャァォォォウ…』
「…そうか、死んでしもうたか…辛かったろう…そうか、人間に…」

「あ、の…長老様…？」
「おぉ、すまぬ…実は……」

フードを外した長老の頭に…
白髪混じりな、もっふもふの黒猫耳！

「ヤコウ村の村人たちは全員、擬獣族（ぎじゅうぞく・ティアグラ）なのです。」

「猫耳だぁあああーーー！」

いや、おじいさんだけど！

ついにでた！

つーことは村人全員、何かしらの獣耳！！

超見てええぇぇぇ！！

キターーー！！

獣っ子、キターーーーーー！

１１話。　迷子の捜索依頼。（後書き）

アッシュ、テンションあがりすぎです。
次回、獣っ子祭り。（何

12話。　サンダーブリッツキャット（雷猫）

――――――さかのぼること　森へ入って約30分くらいのときのお話――――――

「なんでこんないきなりでてくるよ、大型モンスター！」

「きゃぁあああーーーーっ」

「えーとえーと、サンダーブリッツキャット！風属性の雷！だからえーと、ノムーラ・フェ！お力を！！　土砂床（マッド・マッド）！！！」

ずどごごごごごごごごごごごご！

『ぎにゃぁああああ！』

「ちぃ！　足止めにもならないか…　姉ちゃん、攻撃魔法！！」

「しゅ、集中してないとできないよぉ！！」

「もーー！どーすんだよこれぇ！？　村までいけねーよ！」

『ぐるぅぉおおおおおおあああああ！！』

『コルォオオオオ！』

がぶぅぅ！！

「ルーナン！　間に合った！！」
「あぶねぇ…！」
「ルーちゃん！」
『グルルル…』
「ルーナン！追い払うだけだよ！まだ子供だ、ころしちゃだめ！！」
『フシャァァァァァ！！！！』

『（まじゅーが、にんげんのいうことときくな！　うらぎりものめ！！）』

「！！？？」
「どうしたアッシュ？」
「に、兄ちゃん、今何か聞こえなかった？誰かしゃべった…！」
「はぁ！？　俺たち以外に誰かいるのか？」

『（ママをかえせ、にんげん！！　きらい、きらい、きらい、きらい！！！）』
『グルルゥォォォォォォォォォォォォ！！』

『（にんげんなんか、いなくなれぇえええ！　ママをかえせーーーーーーーー！！）』

「きみのママ…　殺されちゃったの？　人間に？」

「「！！？？？？」」

『（！？）』

『クルルゥウ……』

「大丈夫だよ、僕たちはそんなことしないよ。　仲直りしよう、ママのところ、連れて行って。あやまらなくっちゃ…」

「「アッシュ！！？？」」

「大丈夫、聞こえてる。君の声、わかるよ。　おいで…」

『（な、なんだよおまえ！！　きみわるい！くるな！！）』

「うん、自分でびっくりしてる、でも、聞こえちゃったんだもの…ほうっておけないよ…」

『（やだ、くるな、　こないで……！！！）』

だだだっ・・・！

「あ、まって！　ルーナン、追って！！」

『ルォウ！』

「ちょっとアッシュ！？」

「おい！！」

しばらく走って…追いついた先にあったのは…

「お、…お墓…？」

『ニャォゥ…』

『……クルルル…』

おそらく、母親の亡骸に土をかぶせただけだと思うが、その上に石が乗せてある。
このサンダーブリッツキャットには、「埋葬」の意思があったんだろう…

大きな体を震わせてにゃぁ！と鳴く…

そこに現れたのは…

「え、ええ！？　まさか…幻影！？」

ルーナンと同じくらいしか背丈がない、紺色に金のラインの猫。縮んだ！！？？
いや、猫としては大きいけど…　ルーナンも子供だけど狼だから。
それをさしひいてもさっきまでの巨大なモンスターとは比べ物にならない。
でも、ルーナンが腕に噛み付いてた…とすると…

「一時的な、肉体の強化ってことかな…すごいなぁ…」

そっか、このお墓に人間が近づかないように見張ってたんだ…

「……」

だまってお墓に向かって手を合わせてしゃがむ。
しばらくして立ち上がると

猫が、ぐいぐいと頭を押し付けてくる。

『にゃぁ…』
「…あれぇ…？声、聞こえなくなっちゃった…なんで……？」
『ルルゥ…』
「……まぁ、いっか。仕方ないよね。　ねぇ、もしよかったら、いっしょにこない？　でも、今、お仕事でまたすぐ行かなきゃいけないんだ。　もし、もしね、僕たちと一緒におうちに来てもいいよって思ってくれたら、僕たちが戻ってくるまでルーナンと一緒にいてくれないかな？お迎えにくるから…」
『…みぅ？』
「お墓参りも毎年来るよ。　もうちょっと場所、移動したほうが安全だと思うから、姉ちゃんたちと相談するから…　ママのこと、ちゃんとおまいりしようね。　大丈夫、約束するから、ね。」
『……』
「ルーナン、僕とお兄ちゃんとお姉ちゃんが戻ってくるまで、この猫さんと一緒に待っててくれる？」
『クルォォン！！』
「…ありがとう、ルーナン。」

「君にも名前、あげるね。　…ライ。」
『！』
「サンダーブリッツキャットには、雷猫っていう別名があるんだって。　そこからとって、ライ！」

『にゃ、にゃ！』
「お、気に入ってくれたかな？　よかった。」

べろん！
「い、いでで！　…猫の舌、痛いのは「むこう」と同じか…はは…
じゃ、まっててね。すぐ終わらせてくるからね！！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで、姉ちゃんたちと合流して、おもっくそしかられて。

また三人で村を目指して歩いて、村について、迷子の親子を探して歩いているときに。

ルーナンとライに遭遇したのです。

何っていう偶然だよこれ！！
どれだけラッキーだよ！！

残念なのは…ライのお母さん…

もう少し早くあの依頼書がジュニアギルドに届いていれば…
二人とも無事に会えたかもしれなかったのに…

僕は、長老さんの話を聞きながら、ライの首にすがり付いていた…

「ごめん、ごめんね…ライ…らいぃぃぃ…」

『にゃぁ……』

１３話。　夏の獣耳祭！（前書き）

サブタイトルは、「ヤマ〇キ　春の◇◆祭り」のイメージで読んでください（笑）

13話。　夏の獣耳祭！

「どはあぁ……やっとついた…」
「ミリー姉ちゃん、もう大丈夫だよ！」
「も、限界……」

魔力を切らしてしまった姉ちゃん。
長老さんをかついで走ってた兄ちゃん。もう、ぼろぼろ……
ルーナンの背中に長老さんをのせて、兄ちゃんがつかまった状態で歩いてて、ライ……もとい、ライリエナさんの首に姉ちゃんをつかまらせて。
無事にヤコウ村へ帰り着きました。

唯一元気なの、僕だけです。

「長老！ライリエナ様！」
「お帰りなさいませ！！」
「長老ー！」
「ライリエナさん！」

「皆、無事にライリエナが帰った！……アグエナは、森で生まれ変わる。いつか新しい命を迎えよう！」

「う、わぁぁぁぁ…！」
「アグエナ様ぁぁぁ……」
「あぁ……、ありがとうございました、冒険者殿…　ライリエ

ナ様、よくご無事で…！！」

ルーナンは、大人しく姉ちゃんと兄ちゃんをよしかからせて、休ませている。
ライリエナさんは、長老の孫というのもあるんだろう。しっかりした態度で村人達と再会を喜んでいる。

せっかく、友達になれそうだったのに…
お別れなんだ…

なんか泣けてきた……

「マルタご兄弟殿、これからライリエナの、擬獣変化（ティアグラ・リング）を行います、どうぞお越しくだされ。」
「え、でも…」
「長老様とライリエナ様のご希望でございます。どうぞ。」
「ささ、きなされ。」
「は、はぁ…」
「……わかったわ、行きます。」
「俺もいくよ…」

「……ルーナン、おいで。」
『クルル……』

案内されたのは、大きなログハウスみたい…な集会場。
その内部には、天井近くにキラキラする丸い石がいくつか吊されているワンルーム。
様々な儀式のために使われる部屋らしい……

「あれはダムセムライト。　悪霊を退け、村を守る…村全体の魔力を安定させておるのだ。」
「どうなってるんだろ、あれ…色がどんどんかわる……！」
「ハハハ、これぞ神の御技だな。　……さぁ、始めてくれ。」

男の人達がはしごを上り、次々石に水をかけていく…

……シュワァァァァ……

「わっ、泡が吹き出した…！」
「すげー…！」
「…あの泡と水滴を浴びることで、森からの魔力を程よく受取り、自らの体内で変換し、擬獣人（ティアグラ）として活動するための魔力にする。……ヤコウ村だけでなく、擬獣族はみな、この魔法石の泡を赤子のうちに浴びているのだよ。」
「準備できました。ライリエナ様、どうぞ…」
『にゃぁ。』

ぱたぱたと滴る水たまりに進んでいく……

……ぽわぁぁぁ……！！

「「うわぁぁ！？」」

「きゃぁぁ！！」

……ばしゃんっ！

「……もどったにゃ…！」

「おお、ライリエナ……！」

「おじいさま……！」

「あわわ、お待ち下さい、ライリエナ様！お肌が！」

「わ、あにゃぁぁ！！　わすれてたにゃぁぁ！」

きゃーきゃー大騒ぎ。

は、鼻血が……！

「うおーっ！すっげえ美肌！」

「ちょっとお兄ちゃんっ？！！」

「（は、裸…っ！！）」

刺激強すぎます…！
この四歳児の体と目には、刺激的過ぎます…！

金毛ラインの黒猫様！！
もふもふの毛並み！
ふさふさした耳と尻尾！
クリーンヒットです！！

実は僕、獣萌え属性です！
今、精神年齢１８歳ですから！
向こう（現実）じゃそういうお年頃ですから！
そんでもって実はロリコンでしたから！
着せられたバスローブが、ぶかぶかなのがまた良い！！
たまらないです！！！

必死に鼻血を押さえて立ち上がると…
バスローブをきたライリエナさんが、駆け寄って来た。

「ありがとうにゃ…！一人きりで、ママのそばから離れるのも辛くて…帰る勇気をくれて、ありがとうにゃぁ…！」

「……いいんだよ。僕のほうこそごめんね…事情も知らずに仲間に誘ったりして…」
「え…？」
「ライは…ライリエナさんは、この村で幸せにならなきゃね。お母さんの分も。幸せになってね。」
「えっ……？」

「僕、またいつかくるね、お母さんのお墓参り。覚えててね。」
「ま、まって…！」
「お、おいアッシュ？どうしたんだよ…？」

…シュワシュワ…
…するっ……！

『！！……グルォウ！』

どんっ！
「わ！！」
「きゃ！？」

突然とび出したルーナン！
ドガッ……ゴッ…！！

「ああっ！」
「魔法石が……！」
ダムセムライトが一つ落下し、勢いよく跳ね上がり…。
「ルーナン！」

僕とライリエナをかばったせいで、欠けて尖った魔法石の塊が背中にぶつかってしまった……！
細かい破片も刺さってる！！

『……グ…ルル……』
「ルーナン！！まって、今抜くから…あ、でも、素手だと危ない…なんか布……っ」
「お、おじいちゃん…！」
「こりゃいかん、まずい……！」

…ぽわぁぁ……

「えっ…？」

……ジュゥゥゥゥ……
…ピシ、パキ……

「「え、ぇぇぇぇぇぇっっ！？」」
「ま……まじかよ…！」

「るー、なん……？」

「……は、はい…小生、ルーナンであります…主殿……」
「「「小生！？」」」
「こ、これは…一体……？この姿は……？」

「どーやら、上手く適合したようだな。」
「適合…？」

「あのダムセムライトの破片が直に刺さって体内に取り込まれてしまった…それゆえに、強制的に擬獣変化（ティアグラ・リング）してしもうたようだ。」

「そんな、ルーナンは大丈夫なんですか！？」

「うーむ……ルーナンさんや。」
「はっ。」
「ちょいと体、さわらせてもらうぞ。状態を確かめなければ…」
「は、どうぞ…」

異様に大人びた仕種のルーナン…
見た目の歳は兄ちゃんとかわらないくらいだと思うけど…かなり筋肉質…
とくに腹筋と足の筋肉すげー…

灰色の毛並み、びしっと立つ狼耳とすらりと伸びた尻尾。内側がふさふさ。
メスのライリエナさんと違って…オスのルーナンは、頬から首周りと胸板、腕と足がしっかり毛皮で覆われている。
生えてないのは顔と腹、腕と足の内側だけじゃないかな？…あ、背

中の毛皮は少し薄い……
しかしこんだけ毛皮でもかなり美形！
思わずマジマジ眺めてしまう…

そして…アレが、でけえ！
平静であれは、もはや凶器だよ！！
しかも下腹部、剛毛！！
ちょ、お前歳いくつだよ！？

「あっ、兄ちゃん…姉ちゃんが気絶してる…」
「そのままにしてやれ…」
「……りょ、了解…」

「うーむ……ふむ…」

ぺたぺたと、ルーナンのひじ周りを叩く長老さん…

「うむ、ここじゃな。両手を交差して、両方のひじを叩いてみんさい。で、引っ掛かりを感じる部分があるはずだ、そこを掴んで引き抜け。」
「……？」
「ま、とりあえずやってみんさい。」
「はい…」

ぐぐっ……

「何だろ…？」
「これができねば、擬獣族として認めてやれないからな……」
「「……？」」
ルーナンは、必死に自信のひじに意識を集める。
「……あった…！」
ぎしっ
すす…ず、りっ
ギャリン！！
「「うおおっ！！」」
「ほっほっほっ見事じゃ。」
「け、剣…ひじか、ら、……！？」
ルーナンの両手には、同じ形の短剣。
いわゆる双剣だ。
「擬獣人は、体から武器を取り出せるんにゃ。私は手の甲からカギ爪にゃん。」
しゃきーん。　と、効果音つきで、披露して見せる。
「すごいなー、二人とも…ティアグラすげー！！」
「……というかよ、ルーナン…いいかげん前隠せ……」

「……前？」
「立派なものついてるんにゃね。ま、おじい様ほどじゃないけど。」
ライリエナ…キミも体外だね…
素っ裸でも別に平気なの…？

「気絶してしまって申し訳ありません…大体は兄達に聞きました。」
「仕方ないですよ、ミリアーナさん。突然の事にキャパオーバーもなりましょう。」
「申し訳ありません、姉君…」
「いや、うん、もう大丈夫…」

何とか持ち直した姉ちゃん。
ルーナンは、長老さんの娘さんの旦那さん…つまり、ライリエナのお父さんの服を何着か借りて、袖や裾を捲くっている。
亡くなったお父さんのものは、捨てられなかったんだね…

「それでは失礼いたします。」
「ありがとうございました。」
「長老殿、どうか長生きを…また、たずねに参ります。」

「アッシュ君。ルーナンのことで困ったことがあったら、すぐ来なさい。今度はわしらが助けになろう。」
「はい！ありがとうございます！」
「感謝申し上げます、長老殿。」

「アッシュ…」
「またくるね、ライリエナさん。」
「あ……」
「またねー！」

「「さよならー！」」

長老さんから、捜索完了の書類をうけとった……
指に針を刺して血をだして、書類に血の跡で指紋を残す…血判っていうやつだ……
あとは、この書類をギルドに提出すれば依頼完了。

この書類はギルドから依頼主にわたされるもので、「生きている依頼主の血液に反応する」大変貴重な書類…
依頼主を殺して血判証だけを持ち帰る…なんて事が出来ないようになってるんだ。
勿論、本人の意志で押さなきゃいけないから、無理矢理押させるのももちろん通用しない。
魔法ってすごいなあ……

「……おい、アッシュ…」
「本当にいいの……？」
「…い、いいの。ひぐっ…ライは、いないの……うぐっえぐ…」
泣いてなんか、いないもん……

……

「ライリエナ…」
「何、おじいちゃん…？」
「行きたいんじゃないのか？」
「……！」
「ええんじゃよ？お前さんのしたいようにして。」
「……そんなの、だめにゃ…私、語尾おかしくなってるし、ルーナンがいるにゃ…」

「彼、泣いてたがなぁ…」

「……」

「どうなんじゃ？」
「……着替えてくる……！ちゃんと話させてにゃ！ちょっと待ってにゃ！」

「ほっほっほ。」
「長老様、よろしいのですか…？」
「なぁに、しかたあるまい。…好きな男と離れるのは辛かろう。」
「……」
「アグエナも、きっと同じじゃったろう…」

……

「主殿…」
「う、く…ひっく……」
「そんなに泣くなら、一緒に行こうって言えばよかったじゃないか…」
「いい……い、いんだよ……ひっく……」

涙腺が壊れたみたいだ。
子供の体は全く言うことを聞かない。
涙を止める術がない。
「ぐずっ……」
言えない。
擬獣人（ティアグラ）とか魔獣とか、そういうのでなく…
ライが好き。

けど……
ライリエナさんは、お家に帰るべきだ。
心配してた家族がいるんだから。

「…会えなくなるわけじゃないもん……我慢する…」
「強情っ張り。」
「意地っ張り。」
「過度の我慢は必ず身を滅ぼします、主殿。」
「……」

がささささささっ……

「追い付いたにゃぁーー！！」

がさがさがさがさっ
ばばっ！

「へ？！」
「まってにゃー！」

がしっ！

「うにょっ！？」
「……主殿に怪我をさせるつもりか貴様は…！そんなスピードで突

っ込んだら危
ないだろうが！」
「耳元で怒鳴るにゃぁぁ！首絞まる！はなすにゃー！！」

森の中を弾丸のように突っ込んできたライリエナ。
軽々と首根っこ捕まえて睨むルーナンにも新たに疑問がわくけど、
今は置いといて……

突然の事に涙も引っ込んだよ！
なんで、ライリエナが追いかけてくるのー！？

「ルーナン、手を離して！女の子をそんな風に扱っちゃ駄目！！ライリエナさん、どうしたんですか？！」
「……失礼いたしました。」

「アッシュ！おじい様から伝言！一回しか言わないからちゃんと聞くにゃ！！」
「伝言……？」

「『ライリエナは、わしにとって大事な孫娘。にゃので、どーーーしても連れていきたいにゃら、全力で口説き落とすこと。』　……だって。ちゃんと伝えたにゃ！」

「「は……？」」
「え、っと…」
「はぁ……」

「にゃ、にゃんだその反応！なんか腹立つにゃ！」
「……それ、承諾は長老さんのところにとりに戻るの？」
「私にまかせるって。…アッシュ達が、どーしても一緒にきてって言うんなら同行してもいいにゃ。ま、私はそう簡単に従わにゃいからそのつもりで……」

「大人になったら、結婚したい。」

「「「「は！？」」」」

「んっと…つがいって言えば通じる？お嫁さんになってほしい。」

「な、にゃ、にゃにゃにを……？！」
「？　口説くんでしょ。毎日でも言うよ。ライリエナが好き。」

あれ、意外と子供の体って便利ー（笑）
素直に言えちゃったよ。

「い、い、いみ、意味違うと思うにゃ……！！！！！」
「なんで？口説くってことは、プロポーズでしょ？」

はい、意味ちがうの、わかってて言ってます。
けどまあ、こういうのもツンデレ猫ちゃんには効果アリでしょ。

「……っ！？」

「まだ子供だし、冒険者ギルドに入れるまでまだまだかかるけど…狩人のライリエナから見たら頼りないかもしれないけど…、必ずすぐ追い抜いて見せるから。いつかお嫁さんになって欲しい。」

「あ、アッシュっていつもこんなんなのにゃぁ！？」
「……いや、初めて見るケースだ。」
「びっくりした…どうしちゃったわけ……？」

「……ライリエナが好きなんだもん…別にどうかしたわけじゃ……」
「にゃぁぁぁ！？」（↑パニック）

「差し出がましいですが…主殿、つがいになるにはお二人とも些か幼過ぎますかと…やはりここは、『お付き合い』というものから……」
「る、ルーナン！あんたまで？！」
「小生は、あくまでも主殿にとって有益な状況を確保しようと……」
「だ、だって……！」
「口説き落とせと申された。ならば間違っていないと思うが…」
「う、うにゃぁぁぁ？！」

「ライリエナ…僕の事、嫌い……？」
「うっ……ち、ちがうにゃ！好きにゃ！！」

もじもじちらちら
うるるーん

全力のかわいい顔。
……子供だからこそ、だけどね！
さぁどーする、ライリエナ？
「う、うぅ……わかったよう！降参にゃぁぁぁ！！」
勝った！
その後。
いったんヤコウ村へ戻り…

長老さんにライリエナを正式にお預かり、将来結婚したい、その旨を伝えた…

そんな報告いらないのに。と、笑う長老。
どうやら僕がライリエナを好きだってことはバレバレだったらしい。

「どうぞ、孫を幸せにしてやってくれ。」
「はい！」

「ライリエナ、どうぞよろしくね。」
「…ライでいいにゃ…」
「え、でも…」
「いいの！いいからそう呼ぶにゃぁ！！！」
「わ、わかったよ…」

「ほっほっほ。」

１４話。　ギルドチームランクって？（前書き）

アッシュが若干変態になってきてます。
ライが大好きだからゆえ、です（笑）
見守ってやってください…

お気に入り登録、本当にありがとうございます！！

１４話。　ギルドチームランクって？

「きゃぁああーーーー！　かわいいいい！！！」
「おおぉ、狼か！すげえな！！」

家に帰るなり…
異常にテンションの上がってる母さん。
どうやら僕の獣好きは母親とも共通していたらしい。
これなら、異世界の記憶を持ってても問題にならないかも…ちょっと安心。

「「よろしくお願いします。」にゃ。」
「ルマルウルフのルーナンと、サンダーブリッツキャットのライリエナだよ。」

「もう、大歓迎よ！　こんな可愛いお嬢さん連れ帰ってくるなんて！　やるじゃないのアッシュ！」
「！　お前、ルーナンか！！！　見違えたなぁ！！」
「か、かわいいだにゃんて…照れますにゃぁぁ…」
「きゃぁぁぁあああー！語尾がにゃーって！にゃーって！！きゃぁー！」
「お久しぶりでございます、父君、母君。　…不躾な訪問にもかかわらず、歓迎していただき感謝申し上げます。」
「いいのよう！こんなコに従順とかなってなくていいのよー。楽になさいな。」
「いやー、これは…王宮仕えさながらの物腰だな…　なんか懐かし

いなぁ…」

「あの、何か…？」

「いやいや、こっちのことだ。気にするな。　…で、メッシュ？」

「ん？」

「ギルドメンバーはどうするんだ？」

「ああ、帰り道で相談してきたけど、二人もメンバーに加えるよ。年が分からないけど、多分あの水晶がだいたいで判別してくれるんじゃないかなーって思って。」

「全員同意なのか？」

「ええ。」

「もちろんだよー。」

「そうか…だったら…　ランク登録したほうがいいな。」

「「「ランク？」」」

「おう、ギルドチームランク。　擬獣人（ティアグラ）は、冒険者ギルドでも珍しいし、引き抜きとかあるかもしれない。でもランク登録してれば『俺たちはチームだ！』っていう、確固たる意思表示にもなる。４人以上のチームじゃないと登録できないからちょうどいいな。」

「へー！」

「いいじゃん、それ。」

「さっそくいこうよ！」

「「賛成！！」」

「お供いたします。」

「よくわかんないけどいくにゃ。」

「そうか。ま、早く帰ってこいよ…母さんがまた落ち着かなくなる…」

「も、もう大丈夫よ！今日は大丈夫よ！！」

「…あれだけうろうろしててか…」

どうやら、今回も母さんはパニックを起こしかけてたみたい。
前、ちょっと遅くなったとき、すげー大変だったって父さんが言ってた…

「じゃ、もっかい　いってきまーす！」
「はやくかえってきてよー！」
「はーい　（笑）」

と、いうわけで、ジュニアギルドへ…

「……はーい。それではこれにてチームメンバーの更新は終了ですぅ。」
「ありがとうございます。」
「わーい！」

「ライちゃんはアッシュと同い年だったのね。」
「うん、四年仔なの。」
「ルーナン…お前、十歳…！？」
「は、そのようです…　とし、というのはよくわからなくて…」
「一番年上だぁ。」
「納得いかねぇ…もっと上だろ…」
「まーまー、落ち着いてよ…」

「それではぁ、明日行う『ギルド認定チームランク試験』について、説明いたしますぅ。」
「「はい。」」

…以下、大雑把な内容です。

1、4人以上のギルドチームであること。
2、使用武器・魔法に制限なし。　…今回は擬獣人（ティアグラ）がいるので、変身魔法とみなして、獣変化も許可される。
3、試験内容はモンスターの討伐。　規定の頭数を討伐した時点で終了。時間を計測する。
4、途中棄権可能。
5、モンスターは、これまで遭遇した中から、一番討伐数が少ない、つまり苦手なモンスターが選出されて用意される。

そんなかんじ、かな。

「何かご質問は？」
「…モンスターは何が出るかは教えてもらえないんですか？」
「そうですね、まぁ、皆さんのほとんどが苦手なものがでるのでぇ、事前に報告すると対策を練ってから挑むことができてしまいますからぁ、お教えできないんですよぅ。…でも大体予想はつくかとおもいますよー。」
「……あんまりたってないし、まだ見当つかないなぁ…」
「そうねぇ…難しいなぁ…」
「…ま、なんとかなるだろ。かえって準備しよう。」
「「うん。」」

「それでは、また明日お越しくださーい。」
「「ありがとうございます。」」
「失礼いたします。」

不安だなぁ…

１５話。　因縁。（前書き）

ちょっとだけ、アッシュたちがキレちゃいます。
残酷ってほどじゃないんですが、普段の彼からは想像つかないかも…
お兄ちゃんはもともとどす黒い人ですが…

15話。　因縁。

翌朝ー……

柔軟、ランニング、縄跳び…
そのほか諸々…
各々準備運動を終えて、いざ！ジュニアギルドへ…！

「お待ちしておりました、メッシュ・マルタさん。そしてメンバーの皆さん。…今回のギルド認定チームランク初期試験の試験官を勤めます、オーハラ・シンカーです。どうぞよろしく。」
「よろしくお願いします。（×５）」
「それでは、地下闘技場へご案内します。」

特大の陽蓄日輪石（ソル・バッテリニウム）が置かれた燭台から、かなり明るい白っぽい光が広がる闘技場。
蛍光灯なんかより目に優しい……やっぱりいいね、魔法！
それに太陽に当てておくと光をたっぷり溜め込むから、使い捨てになるロウソクより経済的だし！
エコだね！
小さくても三つくらい使えば一晩中充分役に立つから一般家庭用も

夜間の照明などとしてしっかり普及している。
うちにも各部屋にニ、三個ずつおいてあるよ。

試合会場はテニスコートくらいの広さ…
正面にはガンガンと体当たりの音が響く暗い檻…

「ルール説明は受けていますよね？」
「はい。」
「では、早速始めたいと思います。……あの檻が開ききるまでは、こちらのラインから出ないくださいね。」
「はい！（×５）」

「き、緊張してきた…」
「ルーナン、相手は１匹かい？」
「（くんくん…）いえ、複数…約２０匹…結構密集しております、中型の爬虫類で土属性です。」
「……よし、アッシュ、ライリエナ、ルーナン、三人で最初から思いっきり突っ込め。まずど真ん中だ！」
「「「了解！」」」
「ミリー、お前は正面から見て左へ構えてろ。俺は右だ…アッシュ達が左右に分散させたと同時に放て！あとは各々…暴れてやろう！」
「任せて！アッシュ、うまく逃げなさいよ！」
「ご心配なく。小生がお守り致します…」
「蹴散らすのは任せてにゃぁ！」
「よし、やるぞー！！」
「「おー！！」」

黒い鎧のメッシュと黒いローブのミリアーナ。
赤い闘着のライリエナは念入りに屈伸をしている。
なぜか灰色スーツが気に入ったルーナンは、ネクタイを締め直している。（たった1日で着方覚えたよ…）

そして僕は、金属繊維の固めな上着とズボン。薄手の胸当てと胴巻きに愛用の針蛇皮のムチ。
ま、ふつーの冒険者スタイル。

「それでは……試験開始！！」

……がらがらがらがら……

檻が開く…

「「えぇ！？」」
「あっ……！？」

「主殿…あれは……！」
「マッドドラゴンにゃぁぁ！アッシュ、早く構えにゃいと！」
「まて、ライリエナ、まずい……！！」

「言われたはずですよ、一番苦手なモンスターが出る、と……！」

ガゴォォォン…！

「うー…っ！なんだかわからないけど、先行くにゃ！」
「だめだ、ライリ…」

「「「動くな！！」」」
「ふにゃ！？」

「火精霊（ザラマン・フェ）、お力を。溶岩表大陸（マグマエリア）！」
「木精霊（ツリドナ・フェ）、力を貸せ！寄生木剣士（パラサイト・ナイト）！」
「風精霊（シルルフ・フェ）、お力を…暴虐風気圧（パスカル・バイオレンス）！！」

ボゴォォォ……！！
ずぶしゃっ！！
ぐしゃ……みち、ぐしゅ……

「ひ、ひにゃぁぁぁあああああ！」
「あぁ……やってしまったか…」

「な、なんて技を……！！」

「…ふっ、ふっ……」
「はー…はー……」
「……ふぅ…」

約2分後……

マッドドラゴンの死骸が、山積みになっていく……

「いや……いやにゃぁぁ……！！」
「…落ち着いて、大丈夫だから……しかしまいったな、主殿…どうするつもりだ…」

びきびきびき……めき、めき…
ずず、ずぶずぶ……ごきん！ずりゅ……！

べきゅっ　…どちゃっ…

「ふう……これで終わりですか、オーハラ試験官？」
「は、はい…」

血みどろのメッシュ兄。
まぁ、僕も反り血と泥でぐちゃぐちゃだ…
ミリー姉ちゃんはまだきれいなほう…

マッドドラゴンたちは、ほぼ一切抵抗できないまま、全滅した。

３分５９秒。
僕たちの結果。

ランクはDとなり、　AからFまでの中で、下から三番目。
ま、それなりってこと。

「ありがとうございました…」
「ちょ、ちょっと待ってくれ！！そのままの格好で出て行かれるのはかなりまずい！！」
「…あぁ……そうですね…」

「…本当にどういうことなんだ……あの呪文は、含有魔力の最上限から半分以上一気に消耗する高位魔法じゃないか！　ジュニアギルドにいる年齢で、使える魔法じゃない！！」

ぬらしたタオルをわたされて、顔や服をぬぐっている間、オーハラ試験官さんはずっと不審そうな顔をしている…
一方のルーナンは、ライを必死になだめている…
悪いことしちゃったな…
でも、おさえられなかったんだもん…

「母が、教えてくれたんです。　緊急事態に備えて…またあんな目にあわないためにって。」
「え？」
「俺たち、小さいころに誘拐されかけたことがあったんです。　そのときお袋はパニックになりかけてて、俺たちを助けるどころじゃなくて…ひどく後悔してたんです。　だから、自分の身は自分で守れるようになってほしいって言って、４歳くらいのときに、ひとつづつ教えてくれました。」

「そ、そんなばかな！？　子供に教えていい魔法じゃないぞ！！」
「母もそう言っていました。　だから、本当に緊急事態にだけって約束しています。」
「…アッシュは覚えたばっかりだったな。含有魔力が生まれたてから結構高くてすんなり使えるようになりやがって…むかついたなぁ！」
「か、かんべんしてよぉ…」
「今のどこが緊急事態だったんだ！！？」

「「「マッドドラゴンが相手だったから。」」」
「はぁ！？」

「本当にいやだったんです、トラウマで…　だから、出来る限り戦闘は避けてきたのに…ここで出てくるなんて…」
「暴走しないように必死に呪文思い出してさ。　マジあせったぜ…」
「…赤ちゃんだったから覚えてないけど、拒絶反応出っ放しでした…やっと落ち着きましたよ。」

「あっしゅ…」
「主殿…」

「ごめん、ルーナン。迷惑かけて…　ライ…怖かったよね、ごめ

ん…」
「…嫌にゃ…」
「ライ？」

「あんな怖いアッシュを見るのはもう嫌にゃぁ！　あんな呪文もう使っちゃだめにゃ！約束してにゃぁぁぁああ！！！」

ぼろぼろ泣きじゃくるライ…

「主殿、いくら憎い相手の乗っていたマッドドラゴンと同じだったからっていっても、彼らは関係ありません。やりすぎです、慎んでいただきたい…」
「うん、反省してる…もうしないよ。　大丈夫。」

「ひっく、ひっく…」
「……ごめんね、ライ…」
「う、うにゃぁぁぁああ……」

結局、ライの機嫌を直すのに
山鳥の煮込み料理を3人前おごるという約束をすることになった…
早くお仕事いってこなきゃ…（滝汗）

「いってきまーす！」
「一人で大丈夫か？」
「うん、すぐもどるよー！」

「（むすぅ…）」
「ライリエナ、そろそろ機嫌を直したほうが…」
「うるさいにゃ、だまるにゃ。」
「はいはい…」

１５話。　因縁。（後書き）

スーツ、大好きです！
ルーナンの服装、考えに考えた結果。
スーツ絶対似合うの！！
一番年上だし、大人になったルーナンはもっともっとスーツの似合う男前になりますよ！！
そして、アッシュに従順なの！
狼万歳！！（何がだ）

でも結局ルーナンもライも出番ないし…あれぇ？（冷や汗）

１６話　滝　炭菓。（たき　すみか）（前書き）

今頃気がつきました。
乳児期のキャラ紹介のままだ！！
次回幼少期のキャラ紹介載せます…

１６話　滝　炭菓。（たき　すみか）

「うわぁぁ……大きな門！」

ようやく次の国にたどり着いた。
ここが、モノトーン国…

「早く王様に石をもらわなくちゃ！…それからお兄ちゃんを探すのが条件だもんなぁ…」

塀に囲まれた巨大な国。
二つの村に分かれていて、その中央には王都。
……とはいえ、どこもかしこも畑や果樹園。
王城も、やや豪勢な御屋敷といった感じ。
のどかな国だなぁ。

ギルドのA'級カードを見せればあっさり通れる。
１５歳で成人っていうのもやっぱり異世界って感じ！
さーまずは、アイテム換金してご飯だ！

……

ガツン……！

「今すぐ、スった財布を主殿に返しなさい…！」

「ひい、ひい…はいいい…！！」

「るっルーナン！剣しまって！！刺さってるよぅぅ！！」

スーツ姿で短剣首に突き付けてるとかもう、殺し屋っぽいよ！ヤクザとか！

勘弁してー！

……泣きながら逃げていくスリ男を見送り、お使いの続きへ。

「主殿…異議は無いのですが、その…たずねたいのですが…」

「うん？何かあった？」

「……その…何故、あれほどの実力がありながら、ご老人のお使いを…？」

「ギルドに依頼があったから。」

「いや、その…」

「まぁ……ルーナンは狼だし、狩りをするのは当たり前だもんね。でも僕は、別にモンスターハンターになりたいわけじゃないんだよ。」

「は、ぁ……？」

「人助けをしたくて冒険者を目指すんだ。モンスターの退治は二の

次。姉ちゃんと兄ちゃんは倒す事が目的みたいだけど、僕はそうじゃない。依頼を果たす上で、障害になる事情を取り除く作業の一つとして、モンスター退治をする。その違い、ね。」
「んん…はい……」
「まぁ無理に理解しようとしなくていいよ、意見の違いは当然だもん。どうしようもなくなったら、遠慮なくチームから離脱してくれていいよ。…ルーナンはあと五年で冒険者ギルドに移籍だもん。兄ちゃん達ともいつかは離れ離れになるから……」

「離れません。」
「……ルーナン？」
「小生は、主殿の従者です。何があろうと…　主殿と離れる六年間、一人でお待ち申し上げます。」

「……ルーナン…」

「小生は、主殿とライリエナ殿が無事に伴侶となられます日まで…全力でお二人を応援致します！」
「あはは…ありがとう。」

……

「はい、確かに。ありがとうねぇ。」
「いえ…スリになんか会わなければもっと早く来れたんですが、すみませんでした。」
「とんでもないよぉ、ありがとうなぁ。」

足の悪い御老夫婦。
買ってきた品物を確認してもらい、依頼完了の書類を受け取る。

「あれ、主殿…血判証明書では無いのですか？」
「ん？……ああ、金額に決まりがあって、それ以上高額な報酬のときに血判証明書が使われるんだ。これはサインもらったらギルドに提出するだけでいい書類なんだよ。」
「そうでしたか…」

「はい二人とも、今日のお礼。」
「「ありがとうございます。」」
「あと、婆さんが作った揚げ菓子。お土産に持って行きなさい。」
「わーい！こんなに沢山！！」
「こ、困ります、報酬以上の物品は…」
「いーからいーから、もっておいき。」
「ありがとうございます！」
「ははは、子どもは素直が一番だよ。」
「…ありがとうございます。」
「またよろしくねぇ。」
「はーい！」
「では失礼いたします。」

秋風が吹きすさぶモノトーン国。
フィールドでは冬眠の準備をはじめたモンスターたちが、食糧を求めて活発になる季節。
これからもっと、巡回や護衛の依頼などが増えるはず。
あとは畑仕事の手伝いとか、乾燥食料の生産。

干し野菜や干し肉、家畜の餌とかも。

兄ちゃん達と待ち合わせのギルド前…
ライはすぐに待ちくたびれたらしく、姉ちゃんと猫じゃらしで遊んでいた。

「アッシュ、ルー君！」
「ただいまー。」
「戻りました。」
「やっときたぁ……遅いにゃ！皆でお昼ご飯って言ったのに！」
「ごめんね、すぐ書類出してくるから！」
「先に注文してくるぞ。」
「あ、僕ナックルチキンとポテトのセットで！」
「小生も同じ物を…紐葱揚げは抜きでお願いいたします。」
「おー、わかった。ルーナンとライリエナは葱類ダメだもんな。」
「にゃん。」

ギルドの隣。
すっかり顔馴染みの鳥肉類専門料理店『チキンレーサー』
モノトーン国の領地で捕れる鳥類肉を沢山取り扱う料理屋で、新鮮な卵や生の鳥肉も販売している。
ライの好きな、ゴタ混ぜモツ煮込みは新鮮で臭みもなく、擬獣人（ティアグラ）に大人気らしい。
……僕は内蔵肉苦手なんだよね……

……

「勇者？」

「あぁ、さっき依頼先の輸入業者の人から聞いたんだけど…南の大陸で現れたらしいな。魔王の討伐だってさ。」

「（もぐもぐ…）まぁ、マユツバものだけどね。あといまは、お兄さんを探しているそうよ。」

「魔王、ですか…？」

「はーい、知ってるにゃ！」

「ハイ、ライちゃんどうぞ。」

「こほん。……『魔王ははるかな昔、第八番目の神『闇神（ダーリアク）』でした。闇を司る彼を人々は恐れ、畏怖し、暗黙のうちに彼と、闇妖精（ダーリアク・フェ）を疎外しました。　しかし人々の中に新しい魔法を開発する学者が現れ、闇の魔法は恐ろしいものばかりでは無くなりました。　闇神（ダーリアク）は人々と繋がれることが嬉しくて、沢山妖精を人々のもとへ仕わせ、自身も沢山神力を使いました。……ところが、人々はそんな彼を利用し始めました。　闇の神力を悪用し恐ろしい『呪い』を次々作り出してしまったのです。　彼はとても後悔し、悲しみました。寂しくて、辛くて、他の神々に助けを求めました。……七人の神が出した結論は、『闇の魔法を封じる』事でした。　闇の魔法は禁忌の魔法となり、再び人々を恐怖させました。闇の神は、悲しみにうちひしがれ、やがて自身の力を押さえ込むために、自ら神力を反転させ鍵となり……魔王になりました。　　人々が、彼が神であったことを忘れかけた現在も、女神『風神（シルルフ）』だけが、彼を愛し続けています。……闇夜にふく風は、二人の静かな囁きといわれています。』　　……ふぅ。」

「はい、よく言えました。ご褒美のチーズ！」
「やったにゃぁ！」
「よく覚えたな。」
「ライすごいじゃん！」
「えへへ…小さいころから神話の絵本大好きだったから、覚えたんだにゃん。」

尻尾がピンピンしてる。
やっぱりカワイイ…

「……で、その魔王を倒すために勇者が…？おかしくない？」
「多分、勇者に…魔王＝元・神っていうことが伝わってないのかもね。」
「この伝説自体も一部の人間にしか伝わってないからな。信仰の薄い都会だと特に……南のほうは文明がかなり発展してるし、金教徒（メタリムきょうと）が多いから。」
「ふーん……」

「みろよあいつら、　擬獣人（ティアグラ）じゃねえ？」
「二匹もいらぁ。」
「おぅ兄ちゃん、一匹貸してくんね？」
「「ぎゃはははは！」」

うっざ……
せっかく可愛いライに、和んでたのに…

「二人とも大事な仲間です、お断りします。」
「どうせペットだら？」

あー、酒臭い…！三人も近寄るな！！
僕の殺気に気がついたルーナンが、肘に手をかけてる…
いかんいかん、落ち着け…

「ああ？何だ兄ちゃん、コエー目つきしやがって。」
「まさか喧嘩しようってのか？」

「……うぜぇ…喧嘩するならもう少し品よく売りやがれ。　腐れ×（くされぴ）×××に、●●（ぴーやろう）野郎に、あとは@@（ぴーお）男。」
「「なんだとコラァ！？」」
「ざけんなテメェ！！」

「ぴったりじゃん？酒臭いし短気だし、一人だけ反応遅かったし。」
「ちょ、やめなさいアッシュ！」
「……どこでそんな単語覚えたんだよ…」

ドガゴゴン！！

「「「がはぁ！？」」」

「子供に拳をふりあげるのは感心しないわ、腐れ×××に、●●（ぴーー）
野郎（やろう）に、あとは@@（ぴーーお）男。」

「「「何だとコラァーー！！！」」」

「うるさい！　七神掌突（ゴッドナックル）！」

どーーーん！！

「「「ぎゃぁぁぁぁ！！！」」」

お、おおおぉぅ……
酒臭い三人ごとドアが吹き飛んだ。

それはいいとして。
あの女の人……
聞き覚えのある声してたな……

くるん。

「久しぶり、灰人お兄ちゃん。」

「「？」」

「……」

「嬉しいわ！八年ぶりよ！お兄ちゃん！！」

「え、誰……？」

「……（脂汗）」

「んもう、無視しないでよ、愛してるわ、お・に・い・ちゃ・ん！！」

「す、す……炭菓ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

「あいらぶゆー！お兄ちゃーーん！！」

「うっぎぃゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！？」

「やーん、そんな叫ぶほど再会を喜んでくれるのね、お兄ちゃん！大好き！！」

「今の姿で、『お兄ちゃん』呼ぶなーーー！！」

ていうか、僕四歳児だぞ！！

なんでわかるんだ！！？

１６話　滝　炭菓。（たき　すみか）（後書き）

御察しのとおり、勇者＝妹ちゃんです。

※登場人物簡易紹介。（少年期編）（前書き）

アッシュ４歳、メッシュ・ミリアーナ７歳の簡易紹介ですー。
前回とちょっとずつ変化してきた彼らに気がついていただけるとうれしいなぁと…思います。

※登場人物簡易紹介。（少年期編）

地球界…日本人。

●滝　灰十　（たき　はいと）
生前、中学二年生。（享年１４歳）
ハンドルネームは、アシュッド。
ファンタジー妄想系中二病患者。
歩道橋から転落死し、異世界『アクリル界・パレタ大陸、モノトーン国』にて転生した。

●滝　炭菓　（たきすみか）
灰十（はいと）の妹。
ハンドルネームは、炭ッ娘（すみっこ）。
兄を亡くした当時８歳、再会した現在は１６歳。
時空のズレや一年の長さの違いから年上になってしまったが妹。
A'級ギルド員、槍使い。
魔法はオールラウンダー。
１４歳の秋に、アクリル界の神様に『勇者』として召喚された。
転生した兄を探すことを条件に付けている。
ちょっと…どころかとんでもないほどブラコン。兄Ｌｏｖｅを全面に押し出している。
『勇者』として、闇魔法を使うことを直々に許可されていて、外道な闇魔法による『呪い』の解除と、捕われた闇妖精（ダーリアク・フェ）の解放を任命された。

アクリル界、パレタ大陸。
（1年が605日（地球の約1．7倍）なので、実年齢に＋2すると地球年齢と比較しやすくなります。そのため体格がちょっとだけ大きい。）
モノトーン国人。

●メッシュ・マルタ（木、土、金属性）
モノトーン国の元気な男の子、7歳。（長男）黒髪。
脳みそ筋肉な剣術少年。
ギルドで腕を磨き、王都の王宮専属護衛兵になるのが目標。
12歳になったら試験を受けるために、先輩騎士による三年間の修業に出る予定。

●ミリアーナ・マルタ
通称ミリー。（火、土、水属性）
メッシュの双子の妹、7歳。（長女）橙髪。
とても賢くて、城下街の図書館によく通っている。
母親を見習い、魔法の勉強をしている。
12歳になったら三年間魔法学校へ通い、ギルドで大活躍するチームを作るのが夢。

●アッシュ・マルタ
マルタ家の末っ子で次男、4歳。橙髪。（風、土、星属性。召喚魔法も使える）
動物に懐かれやすい。
お昼寝と、擬獣人（ティアグラ）のライリエナが大好き。ただ、当のライリエナは

困惑している…
また同じく擬獣人のルーナンからは、主として慕われている。
滝　灰人の生まれ変わった姿で、まだ前世の記憶をけっこう持っている。
本人的には出来れば忘れてしまいたいらしい過去も多々あるようだが……

●ガンキッシュ・マルタ
上記三人兄弟の父親、３３歳。橙髪。（土、風、木、金、星属性）
以前は王宮で門番をしていたが、城下街に接近した魔獣との戦闘で左腕を失い、引退。
ギルドの受付や、期限間近な依頼をこなすのが仕事。
子供が大好きなマッチョ親父。見た目は熊っぽい。
通称『元・門番長』
最近、お腹周りがたるんできたらしく、朝の腹筋とランニングが日課。
ただ、同年代の親父さん達からは『嫌みか！』との声があがる。

●ノリエール・マルタ
ガンキッシュの妻。黒髪、前髪あたりだけが銀色。（オールラウンダー）
約２８歳、３児の母にはみえないスレンダー。（双子出産時は約２１歳）
魔法使いだが、日常生活に便利な魔法のほうが得意。
旦那Ｌｏｖｅで、子供Ｌｏｖｅ。
ガンキッシュの左腕を失わせたのが自分だという負い目と、『呪い』

に頼ってガンキッシュを助けようとした代償の闇墨が、いまだ左足に残っている。

…擬獣人（ティアグラ）

●ルーナン（ルマルウルフ）（土属性）
灰色の毛並みに金目の狼。
約１０年仔。
肌は軽褐色、狼耳と尻尾、かなり毛深い。
礼儀正しく律儀で、アッシュの従者として仕えている。
スーツがお気に入り。
武器は両肘から双剣。
一人称が『小生』。
モノトーンの森出身

●ライリエナ（サンダーブリッツキャット）
通称ライ。（風属性亜種・雷）
紺毛に黄色いラインが栄える大山猫。目は赤色。
軽褐色の肌に、猫耳と尻尾。
約４年仔。
格闘家、武器は両手の甲からカギヅメ。
語尾に『にゃー』類がつく。
アッシュに求婚されていて、困惑中。
でも、嫌いとかイヤな訳ではないようだが…？
モノトーンの森、ヤコウ村出身。

●フィールド専用サポートメカ、「フィサモ」。
チームリーダーであるメッシュのギルドカードに備わっている機能の一つで、そのまんまサポートをしてくれる賢く頼もしい仲間。
（…と、メッシュたちは思っているが、本人（？）は機械なのでどう思っているのか不明…）
「メタリモ・フェ」の加護による相互通話機能を備える。
カード面を二回叩くと通信できて、片言でしゃべる。

……アクリル界、パレタ大陸の宗教。……
火♂（ザラマン）・水♀（ウンデリ）・木♀（ツリドナ）・金♂（メタルリ）・土♂（ノムーラ）・風♀（シルルフ）・星♀（コスミモ）
この七人の神様と従うそれぞれの精霊がつくったとされていて、自然界からもの
を頂戴するさいには必ず神様と精霊に感謝するのが習わし。
属性単体で神を表し…
属性＋フェ＝精霊名。
宗教とかは、マルタ家の場合森の近くにに住んでいるので「ツリドナ教」となる。
それぞれ宗教は結婚や引越しなど、環境で変わるらしい。
つまり、都会に住んでたら、メタルリやコスミモになる。
…闇神（ダーリアク）♂
八番目の神だった。
現在は魔王を名乗り、闇魔法の秩序を守るため、自らを犠牲にし魔力を封じ込める鍵となっている。
ノリエールの呪いについても、無謀な治癒の呪文を唱えた彼女を守

るために、呪いの解除方法のヒントを与えている。
実は、風神（シルルフ）の旦那。

●一年は１２ヶ月、６０５日。閏年は６０６日。
●一月（ひとつき）は、約５０日。

※登場人物簡易紹介。（少年期編）（後書き）

とりあえずこんな感じで。
次回キャラ紹介は、青年期　（アッシュ１５歳）でお会いしませう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6110u/

もやもやクエスト！

2011年11月7日10時02分発行